

金沢大学附属図書館自己点検・評価報告書

平成21年3月

金沢大学附属図書館

目 次

はじめに	
ー自己点検・自己評価からあるべき図書館の姿を求めてー	……3
自己点検・評価ワーキンググループ	……4
附属図書館の現況	……5
附属図書館の活動	……6
評価の概要	……8
評価の結果	……10
評価報告	……12
1 組織・管理・運営	……12
1-1 運営組織	
1-2 事務組織と職員	
2 予算・経費	……14
2-1 予算	
2-2 経費	
3 施設・設備	……17
3-1 施設	
3-2 設備・機器等	
4 情報資源・資料	……19
4-1 資料の収集	
4-2 図書	
4-3 雑誌・電子ジャーナル及び二次資料データベース	
4-4 金沢大学学術情報リポジトリ (KURA)	
4-5 目録情報とコンテンツの電子化	
5 サービス	……23
5-1 開館日・開館時間	
5-2 情報リテラシー教育	
5-3 来館利用及び貸出冊数	
5-4 ILL (他大学等図書貸借及び文献複写)	
5-5 ミニ展示	
5-6 広報	
5-6-1 図書館出版物	
5-6-2 図書館ウェブサイト	

5-7	利用者満足度調査	
6	地域連携・社会貢献27
6-1	県内図書館との連携	
6-2	市民への公開	
6-3	イベント等	
6-4	所蔵貴重資料等の提供	
7	図表・データ集29
7-1	図	
7-2	表	
7-3	平成 18 年度大学情報基盤実態調査による他大学との比較	
7-4	定量的評価指標による基礎データ	
8	自己点検・評価コメント一覧55

附属資料

- 1 金沢大学附属図書館利用者アンケート調査結果報告
- 2 ノートブック “LibQUAL+™ 2008 survey Kanazawa University Library”

はじめに

—自己点検・自己評価からあるべき図書館の姿を求めて—

ここに、みなさまにお届けするのは、平成 15 年度から平成 20 年度にかかる附属図書館の活動に関する自己点検・自己評価の結果です。この間に、われわれの図書館は、金沢大学の法人化という制度的変革と、自然科学系図書館の新設による 3 館体制の確立という大きな変化を経験しました。しかし、図書館が経験したのは、このような本学固有の状況の変化ばかりではありません。図書館一般の役割はごく最近においても大きな変貌を遂げており、それを受けて、「いずれ近いうちに図書館は、情報の管理を電子的に行うだけのヴァーチャルな館（やかた）となり、人が実際に集う場所としては消滅するだろう」と予言した図書館長経験者もいます。例えば、電子ジャーナルのような情報の電子化が進むことで、教員・研究者の来館への動機が弱まり、また学生の学習スタイルが集団でのディスカッションや協同作業へとシフトすることで、いわゆる「静謐空間」とは異なる発想の「勉強の場」が求められるようになりました。

しかし、この先、図書館はいかなる機能を果たすいかなる存在になるべきなのでしょう？まだ誰も未来の図書館の姿をはっきりと描くことはできないのですが、どのような形であれ、少なくとも今後何十年かは、図書館が大学の学術情報の基盤を担うことはまちがいないでしょう。

当面、附属図書館は、これから金沢大学が第二期中期目標・中期計画を定め、実行していくにあたって、その下での図書館の具体的な使命を果たしていかなければなりません。大きく言えば、われわれは、金沢大学憲章に基づく「金沢大学附属図書館の理念」に拠って立ち、教育にあっては「自学自習」、研究にあっては「卓越した知の創造」、地域貢献にあっては「北陸さらには東アジアにおける知の拠点」という目標を達成するための盤石の礎とならなければなりません。

そのためにいま何が具体的に求められているのか、それを本報告書は明らかにしてくれています。その意味で、本報告書は、今後ただちに図書館が実行すべき計画書のエスキース(esquisse)とも言えるものです。

平成 21 年 3 月

附属図書館長 柴田正良

自己点検・評価ワーキンググループ

(座長)

柴田正良 附属図書館長

(委員)

西條清史 医学系分館長・医薬保健研究域医学系教授
宮下孝晴 資料館長・人間社会研究域歴史言語文化学系教授
西村 聡 人間社会研究域歴史言語文化学系教授
森本章治 電子情報学類長・理工研究域電子情報学系教授
笠原禎也 総合メディア基盤センター准教授
鈴木新一 情報部長
内島秀樹 情報部情報企画課長
川添真澄 情報部情報サービス課長

(活動記録)

- ・2008. 08. 06 第1回ワーキンググループ開催（評価要領，スケジュールの承認）
- ・2008. 08～12 評価用データの収集
- ・2008. 09～10 利用者アンケート調査
- ・2008. 11～12 評価用資料とりまとめ
- ・2008. 12. 24 第2回ワーキンググループ開催（委員の追加，評価シートによる評価方法の確認）
- ・2008. 12～2009. 01 評価用資料による評価の実施
- ・2009. 01～02 評価シートとりまとめ，報告書案作成
- ・2009. 02 報告書案の検討
- ・2009. 03. 04 平成20年度第3回図書館委員会へ報告書案提出

附属図書館の現況

金沢大学附属図書館は、第Ⅱ期総合移転に伴う自然科学系図書館の新設にあたり、「金沢大学附属図書館の将来について」（平成12年9月図書館委員会承認・将来構想）において、中央図書館、自然科学系図書館及び医学系分館の3館体制による附属図書館の組織と役割分担を明確にした。これは、附属図書館が3つの地区で、それぞれの分野に最適化したサービスを効率的に行うため、管理部門を可能なかぎり中央図書館に一元化し、中央図書館が角間北地区へのサービスと中央館機能を、自然科学系図書館と医学部分館（現・医学系分館）はそれぞれの地区へのサービスを中心に運営するというものであり、平成17年度の自然科学系図書館のオープンによって、この3館体制の整備が完了した。

組織・管理面では、平成16年度の法人化をはじめとして、平成18年度の事務組織再編、平成20年度の8学部から3学域16学類への再編（以下、学域再編）など、非常に大きな変動があった。

予算面では、情報通信技術の進展を受け、①電子ジャーナルの本格的な導入、②二次資料データベースの拡充、③学生用図書の実充など、全学的観点から特別整備事業「電子ジャーナルの拡充等」の予算配分を受け、学術情報基盤の整備と資料費の共通経費化が進んだ。

教育支援面では、1年生全員を対象とした「大学・社会生活論」及び「情報処理基礎」の講義を図書館職員が分担することにより、図書館オリエンテーション及び情報リテラシー教育を効率的に行っている。

社会貢献面では、3館とも一般市民にも開放しており、館外貸出も実施している。県内公共図書館とは県立図書館の配送便を利用し、相互協力を行っている。また、第四高等学校をはじめとする前身校から受け継いだ特色ある資料群の展示会も定期的に資料館と共催で行っており、図書館講演会・シンポジウムと合わせて、地域社会への文化情報発信の役割を果たしている。

特筆すべきは、附属図書館を中心に構築・整備している「金沢大学学術情報リポジトリ（KURA）」である。金沢大学の教育・研究成果を蓄積・保存し、それらを発信するために整備され、国立大学法人評価委員会による平成19年度実績評価結果の中でも、注目される活動の一つとして特記されている。

一方、施設・設備面では、築40年となる医学系分館と築20年となる中央図書館の老朽化、設備更新の遅れなどによる管理コストの増大、収蔵スペースの不足といった機能劣化がおきている。また、情報資源の電子化資料へのシフト、学生の学習行動の変容といった図書館利用の変化もある。

附属図書館の活動

文書等		
平成 12 年 9 月 「金沢大学附属図書館の将来について」		
平成 15 年 3 月 「金沢大学における学術雑誌の整備について～電子ジャーナル編～(提言)」		
年度	組織・運営・施設整備	サービス・イベント
平成 16 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 理事が附属図書館長を併任 ・ 副館長を配置 ・ 情報部に情報企画課・図書館サービス課・情報基盤整備課の 3 課を設置 ・ 自然科学系図書館竣工 ・ 医学部分館入口自動ドア化, 身障者対応トイレ新設 ・ 国立情報学研究所 (NII) の遡及入力事業を受託 (H16-H18) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中央図書館の土曜開館を 1 時間延長・日曜開館の開始 ・ 特別展を資料館と共催 ・ 「大学図書館への招待」開講
平成 17 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 工学部分館を廃止 ・ 自然科学系図書館仮オープン ・ NII 次世代学術情報基盤コンテンツ共同構築事業 (CSI 事業) を受託 ・ 自然科学系図書館全面オープン 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 石川県図書館横断検索システムに参加 ・ 自然科学系図書館開館記念シンポジウム開催 ・ 「大学図書館への招待」開講
平成 18 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 理事の図書館長併任解除 ・ 情報部を 3 課から 2 課に再編 ・ 情報企画課が旧情報基盤整備課の業務を引き継ぐ形で情報企画係を新設 ・ 図書館サービス課は情報サービス課となり, 5 係から 4 係へ ・ NII CSI 事業に応募, 採択 (H18-H19) ・ 図書館業務システム更新 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「大学・社会生活論」及び「情報処理基礎」開講 ・ 金沢大学学術情報リポジトリ (KURA) 公開 ・ 特別展 (四高) を資料館と共催 ・ シンポジウム (四高) を金沢まち博と共催
平成 19 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中央図書館衛星放送コーナー機器更新, 正面玄関自動ドア化 ・ 自然科学系図書館自動化書庫内環境調査 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 京都大学附属図書館と四高旧蔵教育掛図の画像公開について連携協定締結 ・ 特別展 (師範学校) を資料館と共

		<p>催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 宮本文庫開設 ・ シンポジウム（教員養成）を資料館と共催 ・ DRF 国際シンポジウム（大阪）開催（図書館長参加，地域組織委員担当，セッション座長，ポスター発表に職員参加） ・ DRF 地域ワークショップ（北陸地区）開催 ・ 附属図書館アクションプラン制定 ・ 図書館学生ボランティア発足
平成 20 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 社会貢献室を情報企画課から総務部へ移行（地域連携推進センター） ・ 医学部分館を医学系分館と改称 ・ NII CSI 事業に応募，採択（H20-H21） ・ 情報戦略本部の設置 ・ 自然科学系図書館特別開館の中止，H21 年度より 3 館の平日 22 時までの開館延長を決定 ・ 医学系分館 1F 机，椅子更新，照明器具交換，無線 LAN 設置 ・ 中央図書館冷房用室外機 1 基を冷暖用に交換 ・ 中央図書館無線 LAN と閲覧席 PC 用電源増設 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「大学・社会生活論」改良（教員の体験談を追加），「情報処理基礎」教材改良 ・ 図書館利用者アンケート実施 ・ SPARC Digital Repositories Meetings 2008 (USA) で職員が日本の学術機関リポジトリについて報告 ・ 北陸銀行文庫開設 ・ 自然科学系図書館特別開館の中止に関する学生と館長との懇談会開催

評価の概要

1. 評価対象期間

平成 15 年度から平成 19 年度の実績を基本とした。一部平成 20 年度実施中の業績を含む。

2. 評価項目

組織・管理・運営
予算・経費
施設・設備
情報資源・資料
サービス
地域連携・社会貢献

3. 評価用資料

「平成 20 年度附属図書館自己点検・評価用資料」として、以下の資料を用いた。

- 評価項目毎に現況及び評価指標等を記載した資料（概ね目次の「7 図表・データ集」と同じ資料）（7-1, 7-2）
- 「平成 18 年度学術情報基盤実態調査報告」（文部科学省）を参考に作成した他大学との比較資料（7-3）
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index20/08032421.htm
- 「大学図書館における評価指標報告書（Version 0）」を参考に作成した定量的評価指標による基礎データ（7-4）
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/anul/j/publications/reports/73.pdf>
- LibQUAL+™アンケート結果ノートブック（附属資料 2）
- 金沢大学の中期目標・中期計画に基づく、附属図書館の年度計画及び業務実績報告書

4. 評価方法

各委員が評価用資料をもとに、評価シートを記入する形で行った。評価シートには、6つの個別評価と全体評価を次の4段階で評価することとした。

非常に良好である・・・十分な活動がなされている

おおむね良好である・・・改善の余地がある

ある程度良好である・・・改善の必要がある

不十分である・・・大幅な改善が必要である

また、「評価する点、今後改善すべき点、提言等」についてのコメントを項目毎に記入するか、または「その他」、「全般について」に記入することとした。

評価の結果

(総評)

金沢大学附属図書館の総経費・職員数は、大学規模からすると、決して潤沢ではない。附属図書館は限られた資源のなかで、この5年間で、自然科学系図書館の開館、金沢大学学術情報リポジトリ (KURA) の公開、学術情報基盤の整備、情報リテラシー教育等に取り組んで一定の成果をあげている。しかし、これらの成果は、アンケート調査によれば学内構成員に必ずしも実感されていない。今後、ニーズの適切な把握とサービス機能強化により、改善を図るとともに、附属図書館が自ら活動を学内外に向けて積極的にアピールしていく必要がある。

今回の評価結果から、以下の①～③の項目については、学内合意を得ながら順次整備を進めることが重要となる。これに伴い、新たな「将来構想」の策定と「附属図書館の理念」の明文化を早急に行うことが肝要である。

① 環境整備

大学図書館に求められる機能は近年大きく変化し、現在の中央図書館及び医学系分館は、時代に即した新しいサービス展開が難しい。宝町地区の再開発における医学系分館改築の具体化を急ぐとともに、新たな将来構想に基づいて全ての地区の学生に快適な学習図書館機能を提供し、3館体制の実質化を図る必要がある。また、各地区の蔵書と利用形態に即した収蔵設備を確保する必要がある。特に中央図書館の収蔵状況は極度に悪化しており、このことがサービスへの人的資源の投入を阻害する要因ともなっている。

② 学術情報基盤整備

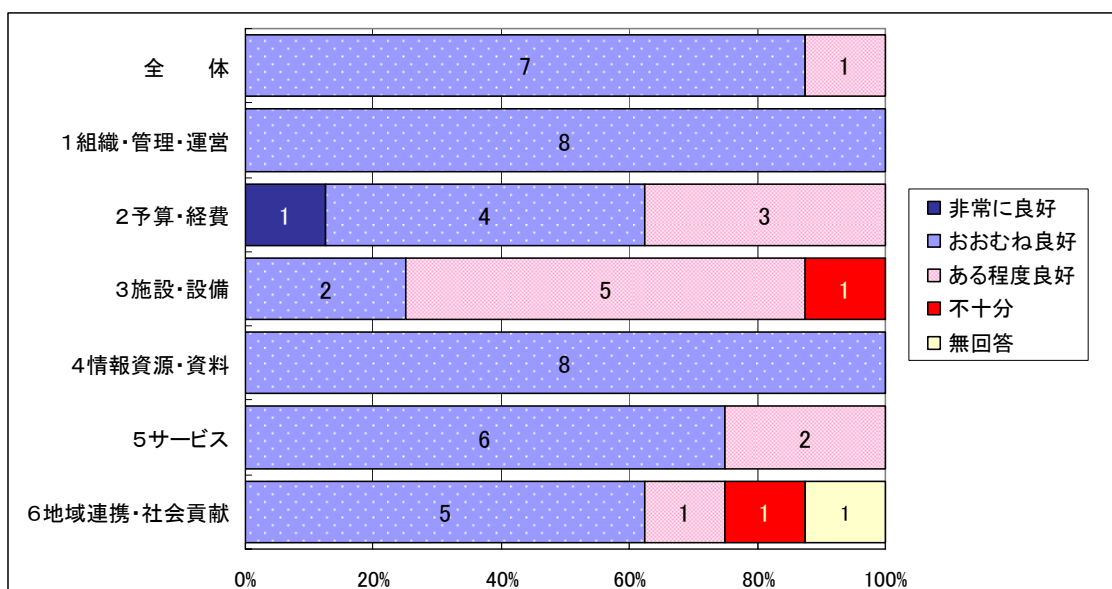
電子的資料及び学生用図書については、これまで重点的・計画的に整備されており、引き続き共通的経費の確保が望まれる。今後は、バランスを考慮し、総合大学として系統だった整備が求められる。

③ 情報発信

金沢大学学術情報リポジトリ (KURA) の整備をさらに進めことによって、コンテンツの充実を図り、金沢大学の教育・研究成果の発信に努める。また、所蔵貴重資料等の体系的な展示及び電子化により、地域及び社会に還元していく必要がある。

(集計結果)

委員 8 名の評価シートによる評点の集計結果は下記の通りである。



全体評価としては、「おおむね良好である＝改善の余地がある」という結果であった。

項目別に見ると、1、4については一致した評価であるが、2、3、6については評価が分かれた。もっとも評価が低かったのは、3 施設・設備である。

詳細については、次頁からの「評価報告」で項目毎に報告する。なお、評価者のコメントは、「8 自己点検・評価コメント一覧」としてまとめて掲載する。

評価報告

1 組織・管理・運営

(評価)

おおむね良好である(8)

1-1 運営組織

【3館体制と館長・分館長】

附属図書館は、中央図書館・自然科学系図書館・医学系分館の3館体制となっており、館長及び副館長に加えて、医学系分館には医学系分館長が置かれている。組織上、自然科学系図書館は分館ではなく、中央図書館に含まれる(図2)。

平成16年度～17年度については、図書館長は情報担当副学長の兼任であったが、平成18年度以降は教授をもって充てることとなった。また、平成20年度の学域再編時に、図書館長は教育研究評議会メンバーから外れた。現在の図書館長は学類長のポストで同会議に出席しているが、“図書館長の立場で”出席することが重要と思われる。

平成20年度現在、図書館長がメンバーとして出席する主な全学会議は、情報企画会議、財務企画会議、キャンパス整備委員会である。

【図書館委員会】

附属図書館の運営等に関する審議は、図書館委員会で行っている。この委員会は、平成16年度の法人化の際、情報企画会議の専門委員会として位置づけられた。図書館固有の議題を扱い、特別なことがない限り情報企画会議での再審議は行わないこととしている。

図書館委員会の下に作業部会を置くことができることから、年度毎に必要な部会等を設置している。主な部会等としては、学生用図書選定部会、自然科学系図書館運営部会、学術情報基盤整備ワーキンググループがある。

なお、医学系分館は、医学図書館運営部会により運営されている。

1-2 事務組織と職員

【事務組織の変遷】

平成 20 年度現在、附属図書館業務を担当するのは、情報企画課の一部と情報サービス課である（図 3）。

平成 16 年度の法人化に際し、附属図書館事務部（2 課）は、事務局情報部へ再編され、情報基盤整備課を含む 3 課となった。情報企画課は附属図書館の管理系業務の他に、資料館業務及び社会貢献室業務を所掌した。

平成 18 年度には、情報基盤整備課が廃止されて情報部は 2 課となった。この時点で情報企画課には、旧情報基盤整備課の業務も加わったことから、情報サービス課を 5 係から 4 係へ再編（参考調査係を廃止）し、情報企画課に情報企画係を新設した。

平成 20 年度には、社会貢献室（現・地域連携推進センター）業務を情報企画課から総務部に移行した。また、本学の情報化を戦略的に推進するために情報戦略本部が新設され、総合メディア基盤センター等の協力を得て、情報部の情報企画課が事務を担当することとなった。

【図書館職員】

附属図書館の職員数は、合計 43 名（うち非常勤職員 16）である。1 人あたりの学生数は 249.8 人であり、全国平均の 1.51 倍（平成 18 年度文部科学省大学情報基盤実態調査、以下、H18 実態調査）である。

旧帝大のような大規模大学と異なり、図書館職員の人事管理を一元化していること及び 3 館体制により、管理系の業務を中央図書館に集中し、複数部局に分散していたサービスポイントを 3 館に集約してきたことが、少人数による運営を可能にしている。その反面、利用者と図書館の距離が出来て、きめ細かな対応がしにくいという側面も併せ持つこととなった。

法人化後の 5 年間で、情報基盤整備を含む情報関連業務が情報企画課の中で比重を大きくしている。特に平成 20 年度の情報戦略本部の設置により、図書館職員が本学の情報化推進に主体的に関与しつつある。一方、図書館の仕事に携わる職員は数に現れない形で漸減している。

教育支援としての情報リテラシー教育の充実や学術機関リポジトリの構築・運営など、附属図書館が新しく取り組むべき業務は増えている。また、国立大学図書館協会の活動や国立情報学研究所との協働事業にも積極的に参加し、各種講習会への講師派遣及びシンポジウム等での事例報告にも取り組んでいる。さらに、学術機関リポジトリの普及活動においては、国際会議の企画運営や全国で開催される地域ワークショップの運営に寄与している。

このような状況のなかで、図書館職員が専門職としての能力を常に向上させることはもちろんのことであるが、大学職員としてより広い視野を持った職員の確保や、育成体制を確立していくことも必要になってきている。

2 予算・経費

(評価)

非常に良好(1)	おおむね良好である(4)	ある程度良好である(3)
----------	--------------	--------------

2-1 予算

【基礎的予算】

附属図書館に配分される基礎的な予算項目は、以下のとおりである（人件費は別途配分）。管理経費及び図書館事業費は毎年数%ずつ削減されている。

区 分	用 途
特別管理経費 (部局等特別管理運営費)	中央図書館・自然科学系図書館の光熱水費等
教育研究支援施設事業費 (図書館事業費)	部局所要額（業務委託費・施設保守等経費・消耗品費・電子計算機借料・図書費・雑誌費・製本費等）
学長戦略経費（設備充実費）	老朽化設備の計画的更新

設備充実費は、既設設備等の計画的な更新のための経費として配分されているが、3館合わせて年間250万円に過ぎず、絶対的に不足している。そのため、耐用年数を過ぎた機器の修理等にかかる費用が経常経費を圧迫している。

また、図書館事業費には、施設の管理費と図書・雑誌の購入費の両方が含まれるため、予算の削減はサービスと資料整備の双方に大きく影響を与える。平成20年度には部局長戦略経費が配分されたが、実質的に予算が増加しているわけではないので、戦略的な使用は困難である。

【全学及び図書館以外の部局負担予算】

上記に加え、資料費予算等には次のものがある。

区 分	用 途
部局経費からの振替	電子ジャーナル経費部局負担分
特別整備事業 (電子ジャーナル等の拡充)	電子ジャーナル及び二次情報データベースの整備・学生用図書費拡充・リポジトリ構築
科学研究費間接経費	Web of Science 導入
教育経費（留学生経費等）	留学生用図書購入、就職支援図書購入

電子ジャーナル経費部局負担分については、毎年、学術情報基盤整備WGでその配分方法について議論している。部局負担総額は増えていないが、全ての部局が納得できる配分方法を決めることは極めて困難であり、部局からの徴収によらない予算措置が強く望まれる。なお、学術情報基盤整備計画に基づく特別整備事業費の措置により、電子ジャーナルの共通経費化（部局負担総額の縮減）、二次情報データベースの充実、学生用図書の実用化、学術機関リポジトリ構築を実現している。

「電子ジャーナル等の拡充」経費の推移（特別整備事業年次計画）		
平成 17 年度	9,000 千円	法人化以前の文科省からの配分額と同等
平成 18～19 年度	44,000 千円	全学経費と部局負担の比率を変更
平成 20～21 年度	82,000 千円	整備計画による予算措置，全学経費の増

【その他の予算】

その他の予算（学内措置及び外部資金）として、以下の経費を獲得している。

区 分	用 途
キャンパスインテリジェント化経費 （学内応募）	IT 環境整備・所蔵目録情報データ電子化等
学長戦略経費（学内応募）	シンポジウム・展示会開催等
次世代学術コンテンツ基盤共同構築 事業（国立情報学研究所）受託事業	学術機関リポジトリ構築，平成 17 年度から受託 （平成 18 年度以降応募・採択）

2-2 経費

【大学総経費に占める割合】

平成 19 年度の図書館総経費は 495,392 千円である。大学総経費に占める割合は 1.09%，年々増加傾向にある（図 4）。図書館総経費のうち 61%が運営費であり，残り 39%が資料費（部局購入の資料費は除く）である。

【運営費と資料費】

運営費については、固定費の割合が高い。施設・設備の老朽化に伴う維持管理費が増大し、施設環境整備に苦慮している。また、光熱水費の抑制にも限界があり、過度な削減はサービス環境の悪化につながりかねない。

運営費と比較すると、資料費の伸びが大きい(図 5)。資料費については、電子ジャーナルを中心に共通経費化を進めながら同時に、大学全体で手当とする額を増やす努力も行っている。部局からの移算額は増加しているものの(図 6)、特に外国雑誌の部局経費による執行額は平成 16 年度以降大きな変化はない。今後は、共通経費の拡充(2-1)によって、予想される価格上昇分を吸収して他部局からの移算額を押さえつつ、研究大学に相応しい電子的資料の拡充をはかるべきである。受益者負担(ログ実績による課金)の導入については、研究費を持たない大学院生等の利用の抑制につながる可能性もあり、今後も慎重に検討する必要がある。

図書購入費のなかでも、電子資料購入費の比率の伸びが大きい(図 7)。これは、平成 16 年度の学術情報基盤整備計画に基づき、電子ジャーナルの整備を積極的に進めた結果である。

学生一人あたりの学生用図書費は、平成 16 年度の 2 倍以上の 1,590 円になっているが(図 8)、まだ学生 1 人あたり 1 冊には達していない。

3 施設・設備

(評価)

おおむね良好である(2)	ある程度良好である(5)	不十分(1)
--------------	--------------	--------

3-1 施設

附属図書館の3館の施設概要は、表5の通りである。自然科学系図書館の竣工により大幅な施設・設備の充実が図られた。一方で築40年となる医学系分館の老朽化が著しく、築20年の中央図書館は収蔵能力が限界に近づいており、機能劣化が進んでいる。

3館体制下で、各学域・研究域に相応しい学習支援機能・研究支援機能・収蔵機能を勘案した将来構想を新たに策定し、それに必要な水準の施設・設備を鋭意整備していくことが望まれる。また、新たなサービスや設備については、費用対効果と必要性を考慮し、学内合意を得た上で、実現可能な部分から順次計画的に実現する方策をさぐる必要がある。

【中央図書館】

中央図書館では、学域再編に伴い、各地区の研究室等からの返納図書が急増し、収蔵能力が限界に達しつつある。当面は、重複資料の廃棄と自然科学系図書館の自動化書庫の有効活用によって凌ぐことができるが、学術資源を保存するという図書館の重要な機能を維持するために、将来的には増築が必要になる。

また、学生の学習行動の変化に対応した施設の環境整備（機能及びスペース等）が必要であり、ラーニングコモンズ（PC等を利用してグループでディスカッションしながらの学習やプレゼンテーション演習、論文・レポート作成に支援を受けられる施設）の導入も検討する必要がある。従来の静謐空間だけでは、現在の教育に合った学習支援機能を果たすことは難しい。

図書館は自習室を提供する場所ではないが、角間北地区には南地区と比較して、学生が安心して落ち着いて学習できる、あるいは飲食をしながら寛ぐことができるスペースが少ない。全学的な学生アメニティ向上の面からも中央図書館機能を考える必要がある。

【医学系分館】

医学系分館は、宝町地区再開発の臨床研究棟整備計画からはずれており、建て替え計画はいまだ具体化していない。同規模大学である新潟大学や千葉大学の医学図書館と

比較すると極度に見劣りする。熊本大学でも、平成 20 年度に新図書館が建設されている。

当面は、補修による住環境の向上を図る（平成 20 年度から 3 年計画）とともに、同地区のキャンパスマスタープランに着実に組み入れてもらうことが重要である。そのためには、施設整備計画の動向を注視しつつ、施設管理部への継続的な働きかけが必要である。同時に、医学系の学習・研究支援拠点としての図書館機能を早期に検討しておく必要がある。

【自然科学系図書館】

自然科学系図書館は、自動化書庫のメンテナンスを含め、PFI (Private Finance Initiative) 方式により運営されている。平成 17 年度の開館から 3 年を経て、管理委託業者との調整等、運用面も落ち着いてきたが、自動化書庫内を含めた換気、空調、照明調節の運用等に課題を残している。

なお、特別開館（24 時間利用）については、セキュリティ面の問題等により、平成 21 年度から中止する。

3-2 設備・機器等

安定した図書館サービスを提供するためには、設備・機器等を計画的に整備し、運用することが欠かせない。

例えば、中央図書館の電動書架が耐用年数に近づいてきており、メンテナンスに相当のコストが見込まれている。最悪の場合、故障により当該箇所の資料が利用不可能になる事態も考えられる。その他にも自動貸出装置や無断持ち出し防止装置など、高額な機器が順次更新時期を迎えることとなるが、経常的に配分される学長戦略経費（3 館合わせて年間 250 万円）でこれらの設備更新を遅滞なく計画的に実行していくことは困難であり、全学の基盤整備としての枠組みに組み入れていく必要がある。

附属図書館の情報関連設備・機器については、利用者用 PC のウィルス対策や OS の更新などのセキュリティ確保とメンテナンスの省力化の両立が課題であるとともに、無線 LAN、情報コンセント及び電源の整備にあたっては、キャンパスインテリジェント化経費による拡充が望まれる。

また今後、多機能 IC カードの導入計画も注視しなければならない。

4 情報資源・資料

(評価)

おおむね良好である(8)

4-1 資料の収集

附属図書館は、前身校から受け継いだ図書資料や暁烏文庫をはじめとする歴史的に貴重かつ特色ある資料群を所蔵している。これに加えて、法人化以前には、大型コレクションを要求することで研究用図書を整備してきた(表 11, 12)。しかし、現在の学術情報資源収集の重点は、紙媒体から電子的資料に大きくシフトしている。

大学設置基準第 38 条に「教育研究上必要な資料を、図書館を中心に系統的に備えるものとする」とあるように、図書館資料は継続的・系統的に整備する必要がある。これを一旦怠れば、後日回復することは相当の困難を伴う。

図書館資料整備は、設備と同様に将来への投資である。ILL(他大学等図書貸借及び文献複写)で学内に所蔵のない資料も取り寄せは可能であるが、学習・研究に必要な資料を手に入れる際に、時間的・経済的に余分なストレスをかけることは、大学経営にとってもマイナスである。とりわけ学生にとっては、授業で利用する資料、学習に必要な図書が欲しいときに、すぐ手に入る環境を整備しておくことが大切であり、図書館が役に立ったという印象を早い時期に得ることが、自学自習の精神を養うには有用である。

限られた予算のなかで、すべての需要を満たすことは不可能だが、できるだけ効率的に必要な資料を整備するためには、利用者ニーズを把握し、少しでもミスマッチを無くす方策が必要である。

4-2 図書

【蔵書数】

平成 19 年度末現在の蔵書冊数は、1,758,256 冊(学生一人当たり 167 冊、教員一人当たり 1,546 冊)である。平成 16 年度からの法人化に伴い、消耗品を大量に資産登録したため大幅に伸びた。しかし、平成 17 年度以降は重複図書の廃棄が受入冊数を上回ったため減少に転じている(図 10)。特に平成 20 年度からの学域再編に伴い、これまで研究室等に配置していた図書の返納が急激に増加し、大量の重複図書を廃棄している影響と考えられる。今後も、教員の退職等により、この傾向は続くものと予測される。

【年間購入冊数】

研究費による購入を含む年間購入図書冊数は、平成 19 年度 15,633 冊（学生一人当たり 1.5 冊，教員一人当たり 13.8 冊）である（図 11）。法人化，自然科学系図書館新営及び小立野地区からの移転という特殊要因があるものの，傾向としては，研究費による図書購入が横ばいのなか，学生用図書の購入増により冊数が増加している。

【学生用図書】

学生用図書の平成 19 年度受入実績は，4,284 冊である。学生一人当たり 0.4 冊となっている（図 12）。平成 15 年度は，文部科学省の一時的な予算措置による増加であるが，法人化後は図書館で計画的に整備できるよう徐々に学内措置され，冊数も増加している。

中央図書館と自然科学系図書館の学生用図書の選定については，図書館委員会の下に置かれた「学生用図書選定部会」で 4 半期毎に行っている。医学系分館については，独自に選定を行っている。

学生用図書費を継続的に確保していくことは，図書館の蔵書構築に必須であり，学生の様々なニーズに対応するためには，より柔軟な収書体制を検討する必要がある。また，シラバス掲載図書の整備については，シラバスの締切りから講義開始までにタイムラグがあるため，実際の使用図書とズレが生じている可能性があり，フォローが必要である。学生及び教員からの学生用図書購入依頼についても随時受け付けているが，情報が行き渡っておらず，周知が必要である。

今後，FD・ICT 教育推進室と連携協力し，新アカンサスポータルの活用の検討に加えて，平成 20 年度に本学と北陸銀行との包括的連携協定に基づき寄贈された「北陸銀行文庫」の拡充も継続的に進める必要がある。

4-3 雑誌・電子ジャーナル及び二次資料データベース

【電子ジャーナル】

「金沢大学における学術雑誌の整備について～電子ジャーナル編～（提言）」（H15.3.13）に基づき，計画的に整備を進めた結果，平成 19 年度は 5,375 タイトルの利用が可能となり，平成 15 年度比の 351%となっている（図 14）。

なお，平成 20 年度の契約電子ジャーナルは 5,767 タイトルである（表 9）。

【購読雑誌数】

紙媒体の購読雑誌数は，平成 19 年度は 2,303 タイトルであり，平成 15 年度比 56.21%

となっている（図 13）。多くは電子ジャーナルへのシフトによる減少であると考えられる。

【二次資料データベース】

本学では、全国でも比較的早い時期にリンクリゾルバ（=電子コンテンツへの誘導データベース；平成 17 年度導入時は Article Linker，平成 21 年度 WorldCat Link Manager に変更）を導入している。平成 17 年度には Scopus，平成 18 年度には Web of Science を導入し、電子ジャーナルの利便性の向上を図っている。

データベースの利用状況は（表 10）に示す。

利用者アンケートで最も理想と現実のギャップが大きかった項目が「学習・研究に必要な雑誌が整っている」である。また、「私の研究に必要な雑誌が、印刷版または電子ジャーナルとして収集されている」も低評価となっているので、注意しなければならない。

今後、研究大学として必要な中核的雑誌（例：Nature 及び姉妹誌，Cell Press 全体タイトル等）の整備が求められる。

4-4 金沢大学学術情報リポジトリ（KURA）

平成 18 年 6 月、本学教職員等が教育・研究活動の成果として生み出した学術論文、紀要等の全文を登録し、インターネットを通して世界中から利用可能とする「金沢大学学術情報リポジトリ（KURA）」を公開した。KURA（Kanazawa University Repository for Academic Resources）の登録状況・利用状況とシステム構成図は、図 15, 16 に示す。コンテンツ収録数は 8,516 件（平成 19 年度末現在）、年間ダウンロード数は 90,173 件（平成 19 年度年間実績）となっている。

平成 19 年度は、教育研究等実績データベースから送信されたメタデータ及び全文ファイルを KURA に登録後、各業績の URL を出力し、返戻する機能を開発した。

国立大学法人評価委員会による「国立大学法人金沢大学の平成 19 年度に係る業務の実績に関する評価結果」の中で、注目される活動の 1 つとして、KURA が特記されている。

また、KURA の事例報告やポスター発表を行うとともに、日本の大学機関リポジトリの活性化の活動（DRF；Digital Repository Federation）に企画委員として主体的に企画し、各地で開催する地域ワークショップ及び国際シンポジウムの企画運営に携わっている。本学においても DRF 地域ワークショップ（北陸地区）を開催した。

4-5 目録情報とコンテンツの電子化

【目録情報の電子化】

研究室等に配置されている1989年以前受入の図書は、OPAC（蔵書検索システム）未登録となっており、オンラインで検索できない。これら未登録資料は、返納時に中央図書館で入力しており、徐々に登録が進んでいる。医学系分館でも、職員が蔵書の入力を順次進めている。OPAC登録率は、平成19年度末で67.25%である（7-4(a2.4)）。

図書館配置の図書にも未入力資料が残っており、平成16年度から18年度にかけて国立情報学研究所（NII）の委託事業「遡及入力事業」で資金を獲得して順次、第四高等学校旧蔵資料等の目録情報電子化を実施してきた。引き続き他の前身校旧蔵資料及び和古書の目録の電子化にとりかかる予定であったが、平成20年度以降はNIIの委託事業の対象が変更になり、資金獲得が困難となった。そのため、これらの図書の登録が停滞していることから、今後も学内のキャンパスインテリジェント化整備計画に応募するなど、継続的な経費確保に努める必要がある。

和古書については、資料の保存と利用・公開の両面の観点から目録の電子化と同時に画像データのデジタル化も視野に入れて検討する必要がある。

【コンテンツの電子化】

平成19年度には、第四高等学校旧蔵教育掛図250点を京都大学図書館機構との協定に基づき、京都大学電子図書館から公開している。

<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/kakez4ko/index.html>

他の多くの貴重資料についても、総合メディア基盤センターとの連携により早期に電子化し、金沢大学のサイトから公開するとともに、教材等に活用することが望まれる。

5 サービス

(評価)

おおむね良好である(6)	ある程度良好(2)
--------------	-----------

5-1 開館日・開館時間

【開館日数・開館時間】

平成 15 年以降の開館日数及び時間の推移は、以下の通りである。詳細は 7-4 (a3. 3)。なお、現在の開館状況は、表 13, 14 の通りとなっている。

- ・ 平成 16 年 6 月 中央図書館の土曜開館の 1 時間延長及び日曜開館の開始
- ・ 平成 17 年 4 月 自然科学系図書館開館

平成 20 年度において、全国 86 国立大学法人中、午後 8 時で閉館している中央図書館は 16 館であり、8 学部以上を有する大学では金沢大学のみとなっている。これは同規模大学と比べてもあきらかに劣っている (図 17)。また、利用者アンケートでも、開館時間に対する不満の声が多い。このような状況を改善するため、平成 21 年度から 3 館の通常期平日の開館時間を午後 10 時まで延長することとした。

【特別開館】

自然科学系図書館では、開館以来、自然科学本館のカードキー所持者が随時入館できる、いわゆる 24 時間開館を続けてきた。規則上は、図書館長が利用できる対象を定めることになっているが、実際にはカードキーの発行システム上、図書館で利用者をコントロールすることができない状態であった。さらに、セキュリティ面、照明・空調等の環境面及び学生の生活習慣面などの問題があり、平成 21 年度から中止することとした。

5-2 情報リテラシー教育

【ガイダンス】

ゼミ等に合わせて行うガイダンスは年 9 回開催し、157 名参加 (平成 19 年度実績) した。また、留学生ガイダンスは年 2 回開催し、各約 30 名参加 (同) した。その他大学院人間社会研究科、病院の新採用職員等対象のガイダンスの一部を図書館職員が担当

している。

【学生ボランティアによるサポート】

平成 20 年度より試験的に学生ボランティアによる新入生サポートを開始した。初年度の登録ボランティアは 9 名。利用案内・利用登録補助などを行った。

【説明会等】

Web of Science, Scopus 等のデータベース利用に関する説明会を年間 7 回開催し、149 名が受講した（平成 19 年度実績）。

【授業との連携】

平成 17 年度までは、教員と図書館職員でオムニバス形式の授業を開講し、年間 60 名の受講者を受け入れた。

平成 18 年度に共通教育機構がカリキュラムを改変する際、新しく設けられた「大学・社会生活論」（1 コマ）及び「情報処理基礎」（1～2 コマ）を図書館職員が担当し、全新生を対象に図書館情報リテラシー教育を行っている（表 15）。このような活動によって、全学生に対して効率よく図書館の利用法や OPAC 等データベースの使い方を周知することができるようになった。また、平成 20 年度に新たに設けられた人間社会学域 1 年生対象の学域共通科目「大学・学問論」（受講者約 110 名）に参加し、「学問と図書館の歴史」のテーマで図書館職員が 1 コマの講義を行った。

平成 20 年度は、学長戦略経費の配分を受け、「新入生の足を図書館へ」というコンセプトの下にビデオ教材「図書館ナビめざせ、達人！ー」（英語字幕つき、平成 21 年度から使用）とパンフレットの作成を行った。今後、FD・ICT 教育推進室との連携協力のもとで、ビデオ教材をベースにした e-ラーニング教材の作成も予定している。

5-3 来館利用及び貸出冊数

全体の入館者数は、平成 17 年度を底に緩やかに回復しているが、小立野地区から角間南地区への移転以前の平成 15 年度の値には達していない（図 18）。このことは、電子的資料へのシフトによる教員及び大学院生の利用形態の転換が原因の一つと考えられる。同様に学生の貸出冊数が回復傾向にあるのに対し、平成 19 年度の教員の貸出冊数は、平成 15 年度の 60%程度に減少している（図 19）。

5-4 ILL（他大学等図書貸借及び文献複写）

現物貸借については、平成 17 年度（角間南地区への移転の年）を除けば、受付・依頼ともに概ね減少傾向にある。平成 17 年度に「借りる」が「貸す」を上回り、その比率は年々上昇する傾向にある（図 20）。

複写については、平成 17 年度のみ「依頼＝取寄せ」が「受付＝提供」を上回っているが、これは移転による影響と考えられる。他の年の比率はほぼ横ばいである。

全体として減少しているのは、電子ジャーナルの普及によるところが大きいと考えられる（図 21）。

5-5 ミニ展示

中央図書館では、カウンター前のホールを利用してミニ展示を随時開催し、所蔵資料の紹介と利用促進を図っている（表 16）。目につく場所に表紙が見える形式で展示することで、学生が図書を手に取り、実際に借りていくという効果が見られる。

「館長おすすめ図書コーナー」は、平成 20 年度から異なる研究領域の教員のリレー方式による「教員おすすめ図書コーナー」と衣替えし、ウェブサイト上での電子展示も開始した。また、平成 20 年度より学生ボランティアによる展示も開始し、好評を得ている。

5-6 広報

5-6-1 図書館出版物

附属図書館の広報出版物は以下の通りである。今後、広報対象に合わせて印刷物の特性を生かしつつ、ウェブサイトとの使い分けをしていく必要がある。

【図書館概要】

隔年発行，発行部数 200，学内及び来客に配付。

【広報誌「こだま」】

年 3 回発行，発行部数 2,000（新生特集は 5,100），学内外に配布。

平成 20 年度から，学外への冊子の郵送配付は中止し，電子メールによる通知のみとした（本文は図書館ウェブサイトで公開）。平成 20 年 12 月現在，166 号発行。

<http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/kodama/index.html>

【メールニュース「ひかり」】

附属図書館の電子メールニュースとして、全教員に随時送信発行している。

従来、図書館報「こだま」よりも速報性のある広報誌としてリーフレット形式で発行してきた「ひかり」（附属図書館サービス速報）を、より速報性を高め、印刷及び配布の効率化を図るために電子メールに切り替えたものである。創刊は、平成 18 年 12 月。平成 20 年 12 月現在、36 号発行。

http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/hikari_mail/index.html

5-6-2 図書館ウェブサイト

平成 19 年度末、図書館ウェブサイトホームページのリニューアルを実施した。今後の課題として、コンテンツの充実、多言語化、新アカンサスポータルとの連携（平成 21 年度）、ユーザビリティの向上（ログの採取と分析）が挙げられる。

5-7 利用者満足度調査

利用者満足度調査については、次の附属資料 1，2 を参照のこと。

- 「金沢大学附属図書館利用者アンケート調査結果報告」
- ノートブック “LibQUAL+™ 2008 survey Kanazawa University Library”

6 地域連携・社会貢献

(評価)

おおむね良好である(5)	ある程度良好(1)	不十分(1)	未回答(1)
--------------	-----------	--------	--------

6-1 県内図書館との連携

県内公共図書館とは、県立図書館の配送便により、資料の相互貸借を行っている(表17)。平成17年度に石川県図書館横断検索システムに本学OPACも参加した。

石川県内横断検索サイト：

<http://www.library.pref.ishikawa.jp/htdocs/cross/index.html>

6-2 市民への公開

平成13年度より石川県内に在住または通勤通学する市民及び本学の卒業生、元教職員を対象に館外貸出を開始した。また、平成14年度に石川県公共図書館協議会との間で資料の貸借等の相互協力に関する覚書を締結した。さらに、平成16年度より館外貸出の対象者を石川県内在住・通勤・通学から北陸3県に拡大した。

利用範囲は、館内閲覧、複写、レファレンス・サービス、図書館・分館所蔵資料の貸出である。

【学外者の利用状況】

平成19年度の入館者数は4,133名であった。貸出冊数は3,501冊で貸出全体の3.16%を占めた。入館者数・貸出冊数とも増加傾向にある(図22)。

平成17年度入館者の減少は、小立野地区から角間南地区への移転作業期間中に一部資料が使用できなかったことが原因と推測される。なお、登録者数は微増傾向にある。

6-3 イベント等

資料館が中央図書館の建物内に併設されているという特色があることから、双方の資源を補いあう形での共催展示は効果的である。今後は、図書館資料の体系的な展示・公開と情報の発信についても検討していく必要がある。ただし、イベントの開催につい

では、費用対効果と他業務のとのバランスを考慮して、過度な負担とならないよう精選して計画することが必要である。

【シンポジウム】

隔年で特別展と交互に開催している(表 18)。ただし、平成 18 年度は第四高等学校開学 120 周年記念イベントを開催したため、平成 17～19 年度は連続開催した。

【講演会（暁烏記念講演会）】

毎年、暁烏文庫の寄贈者である暁烏敏(あけがらす はや)師の功績を称える暁烏記念式と記念講演会を開催している(表 19)。平成 21 年度に第 60 回を迎えるため、これを機に今後の在り方について検討が必要になっている。

【特別展】

資料館と共催の特別展を 2 年に 1 度開催している(表 20)。ただし、平成 18 年度の第四高等学校開学 120 周年記念イベントの開催に引き続いて、平成 19 年度に同じく前身校である師範学校等に関する展示会を開催したため、平成 18～20 年度は連続開催となった。

【その他】

平成 20 年度の国際学類発足にあたり、EU フレンドシップウィークイベントに来県したルクセンブルク公使を招いて講演会(特別授業)を行った。

6-4 所蔵貴重資料等の提供

地域、国内の博物館等やテレビ局からの求めに応じ、展示会への出陳及びテレビ番組等への資料提供等を行っている(表 21)。

7 図表・データ集

7-1 図

図1 運営組織図(平成20年4月1日現在)

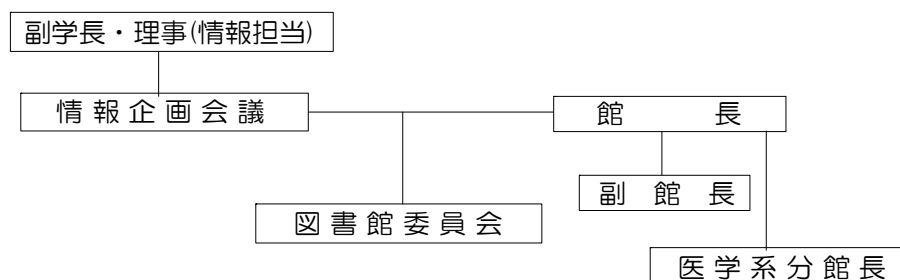


図2 附属図書館組織図

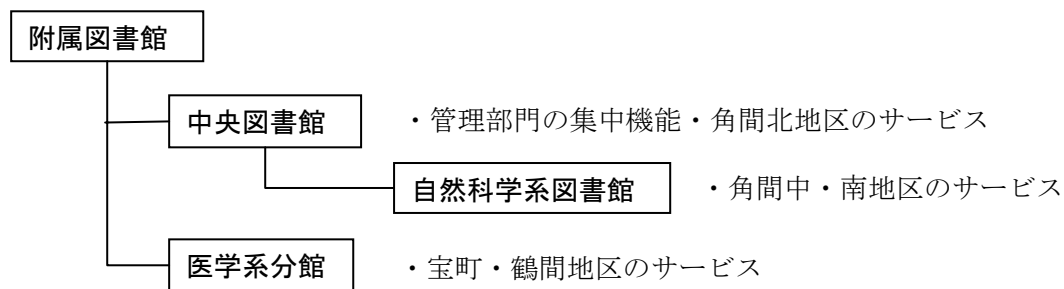
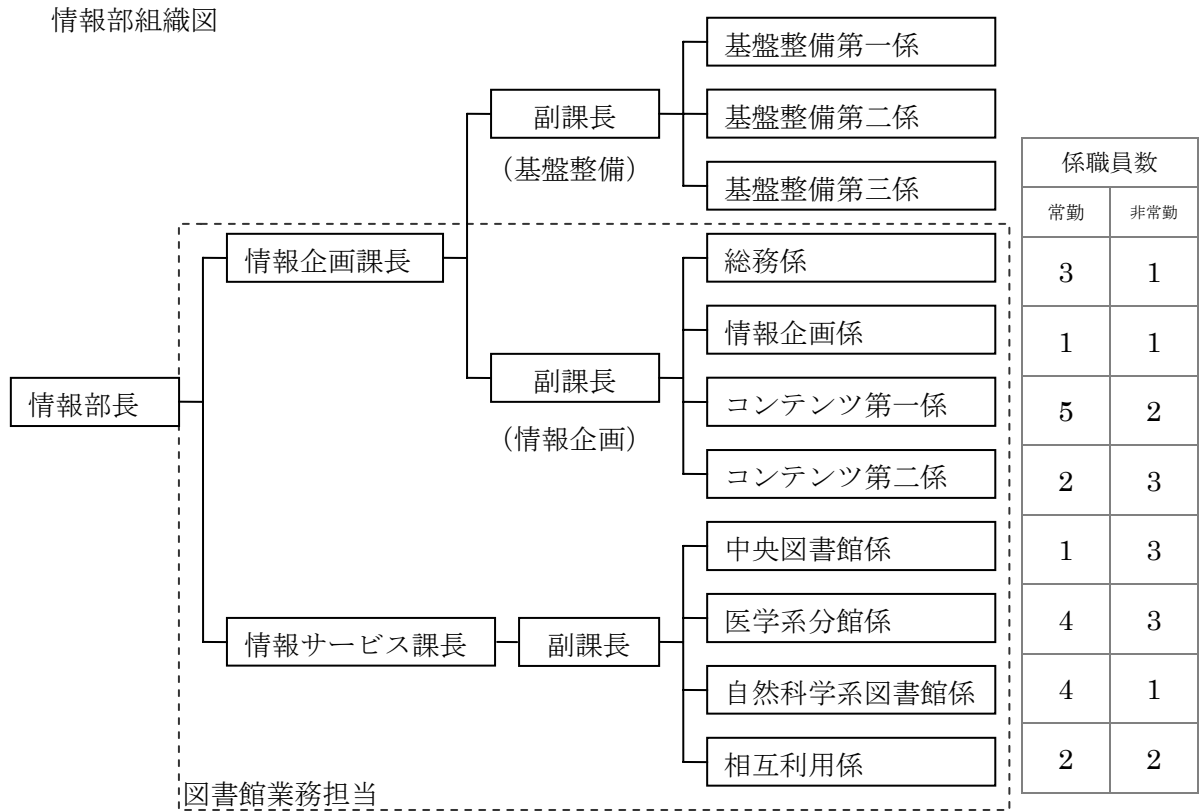
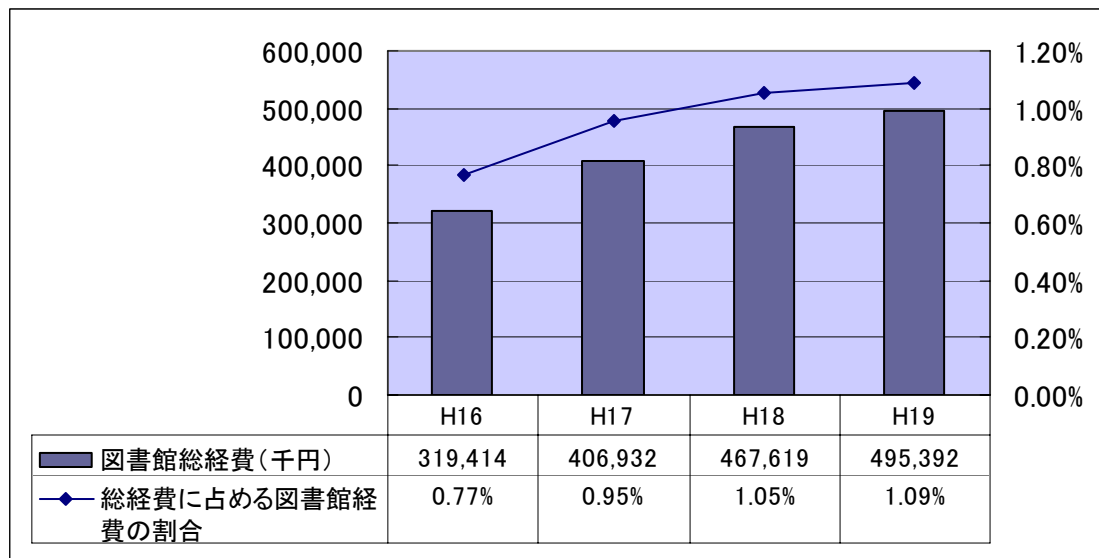


図 3 事務組織図



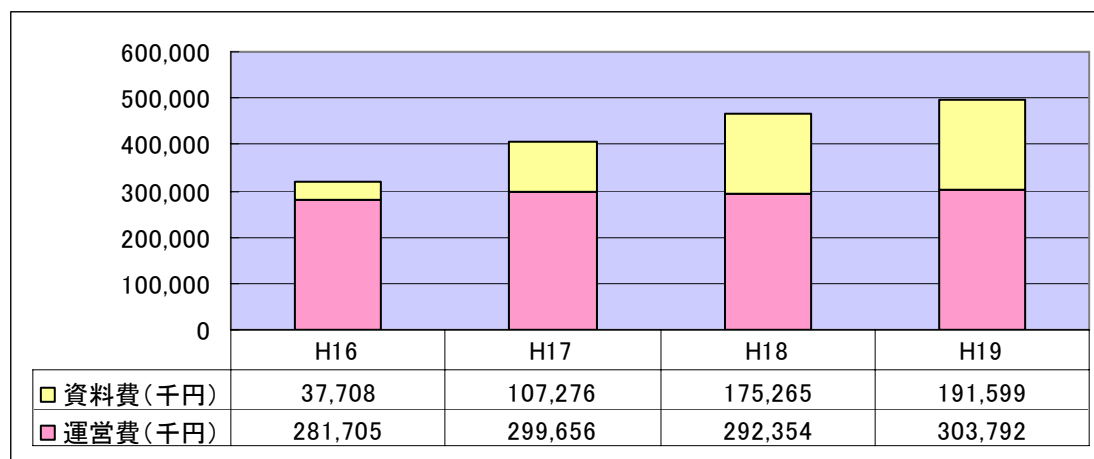
平成20年4月1日現在

図 4 大学総経費に占める図書館総経費の推移(平成16~19年度)



注)「大学総経費」は財務諸表の「経常費用」, 図書館総経費は部局で支出する資料費を除く。

図5 資料費と運営費の推移(平成16～19年度)



注) 平成16年度の運営費は、特殊要因の移転事業等経費143,993千円を除いた額

図6 資料費の出所別比率の推移(平成16～19年度 単位:千円)

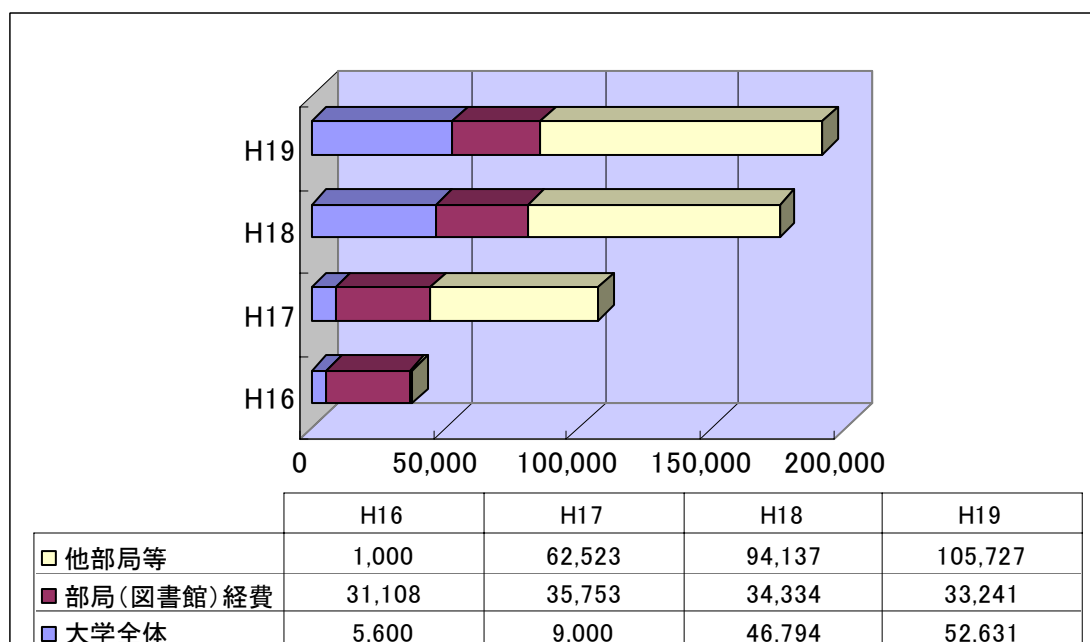


図7 資料費の種類別比率の推移(平成16~19年度)

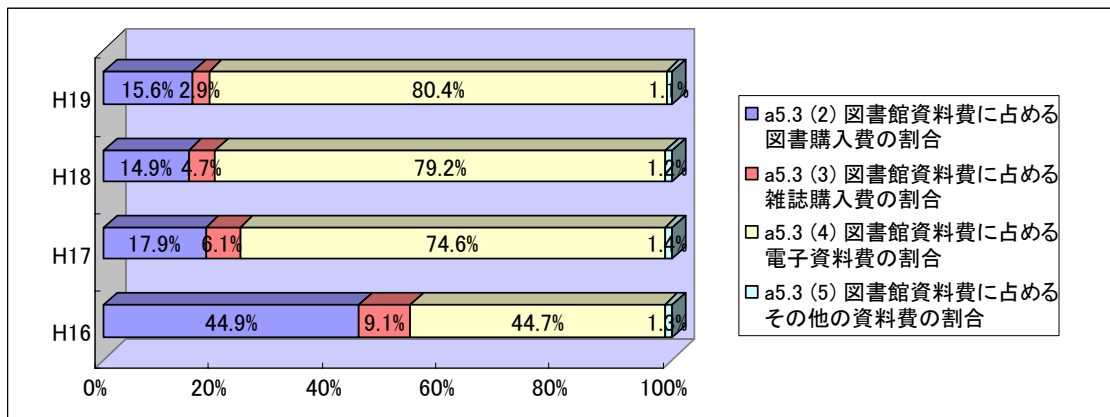


図8 学生一人あたりの学生用図書費の推移(平成16~19年度 単位:円)

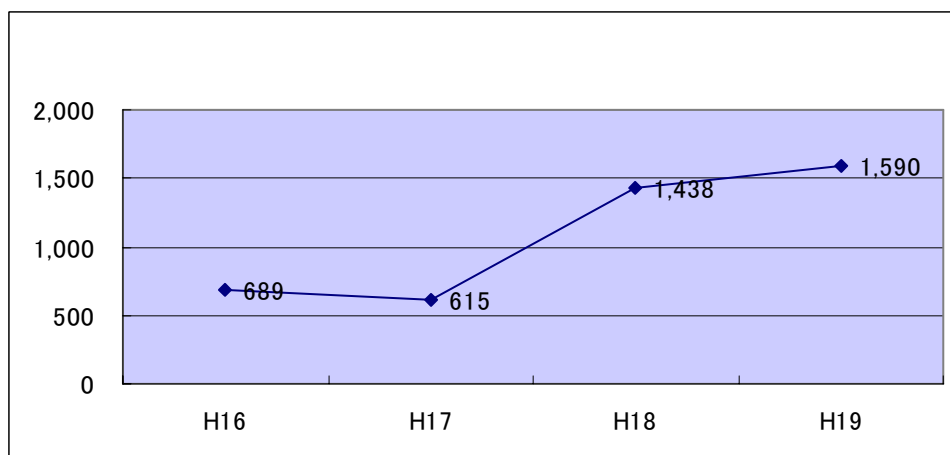


図9 図書館総経費に占める図書館資料費の割合の推移(平成16~19年度)

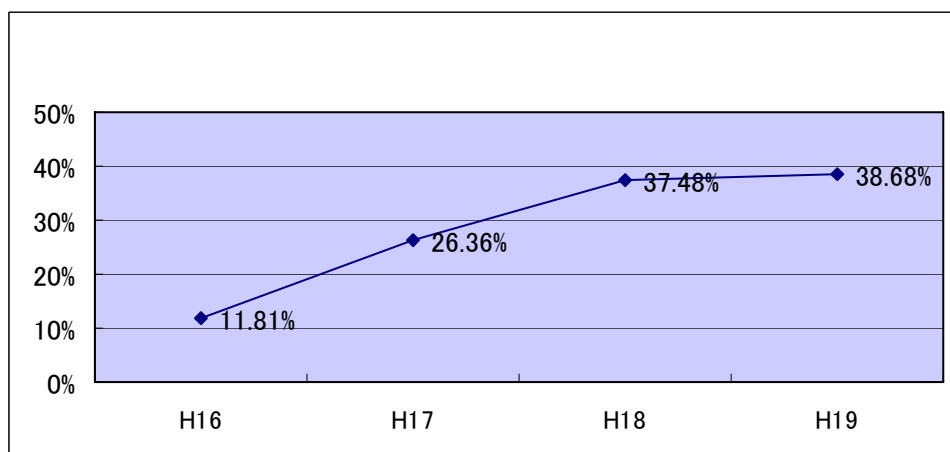


図 10 蔵書数の推移(平成 15～19 年度)

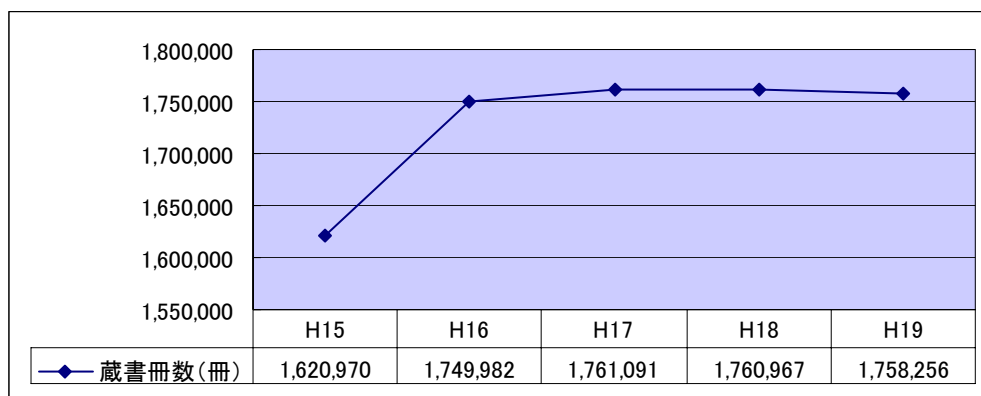


図 11 年間購入図書冊数の推移(平成 15～19 年度)

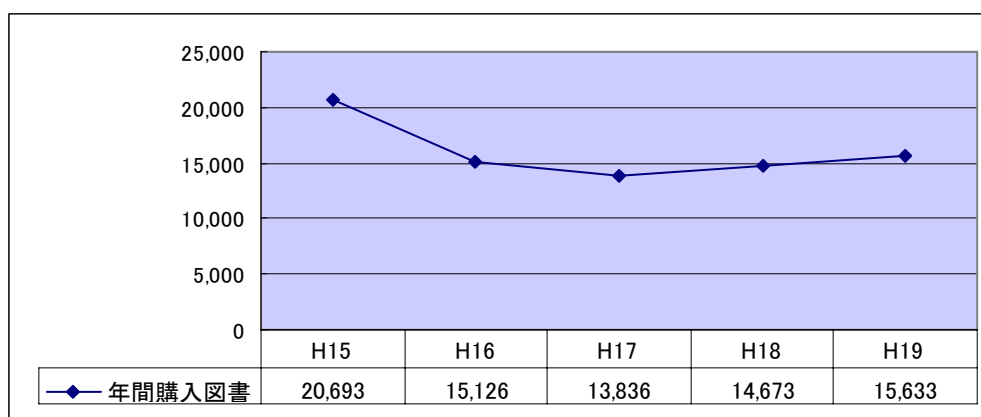


図 12 学生用図書購入冊数の推移(平成 15～19 年度)

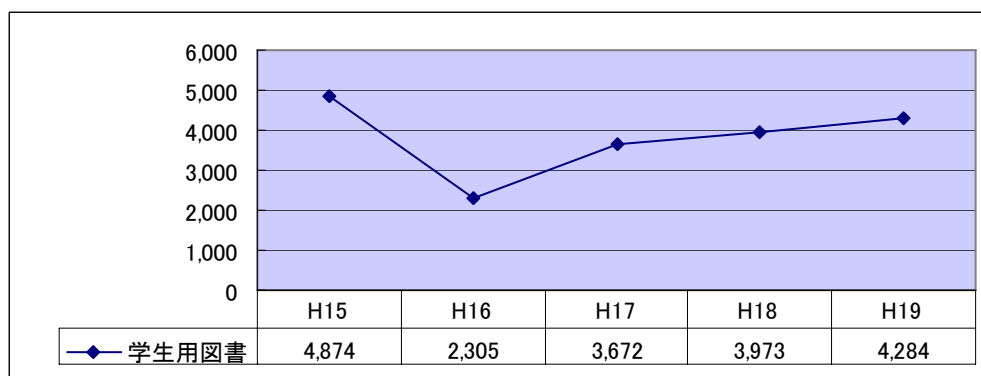


図 13 購読雑誌数の推移(平成 15～19 年度)

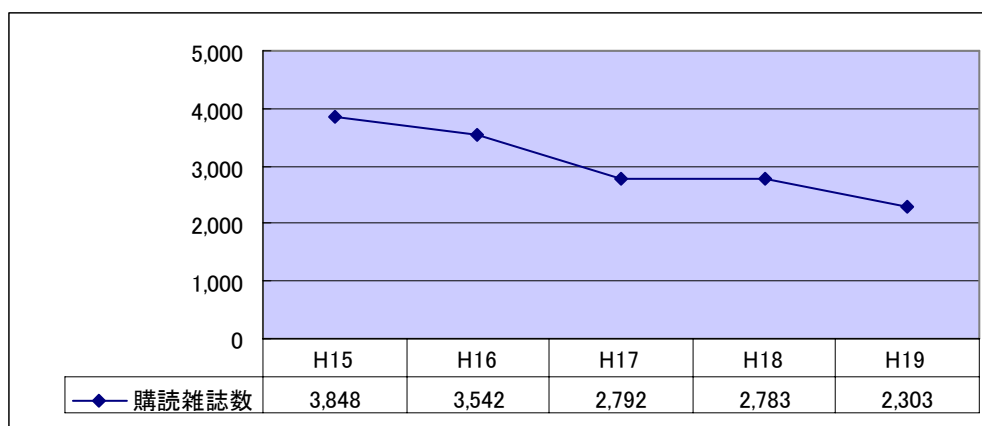
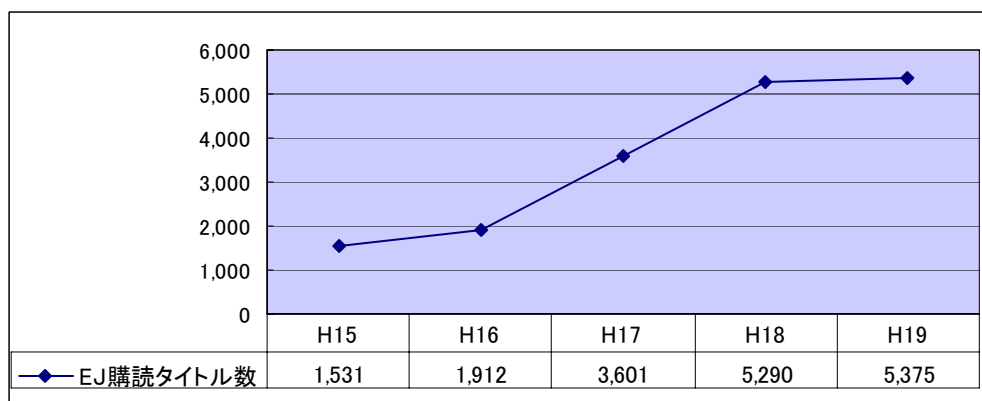
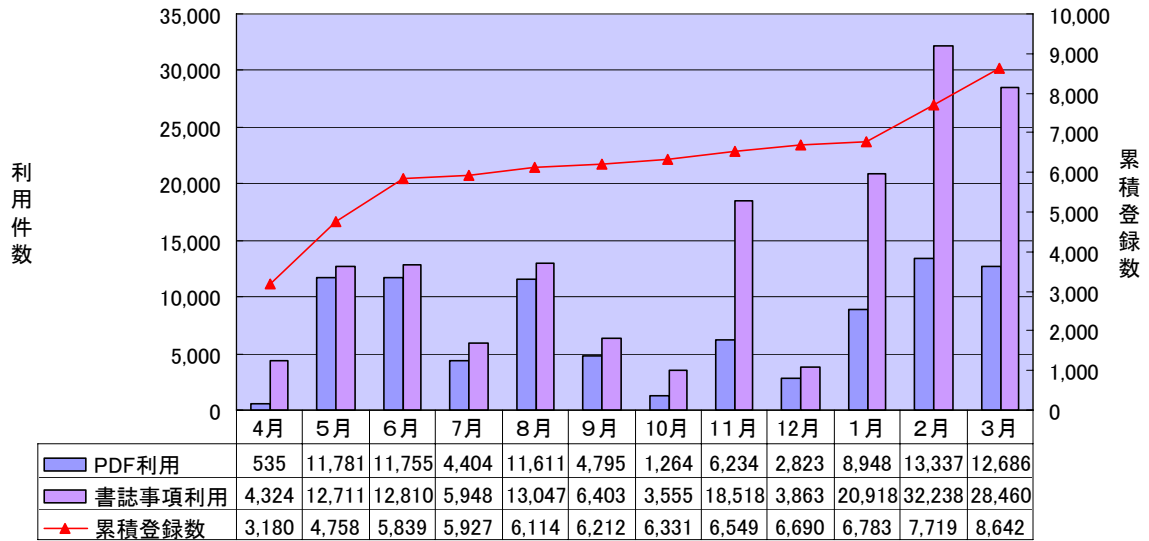


図 14 購読電子ジャーナルタイトル数の推移(平成 15～19 年度)



注) 電子ジャーナルタスクフォース契約状況調査報告より (外国雑誌・国内誌合計)

図 15 KURA のコンテンツ累積登録数と利用件数(平成 19 年度)



注)「累積登録数」には削除済データ件数も含んでいるため 実際の収録数より多くなっている。

図 16 KURA システム構成図

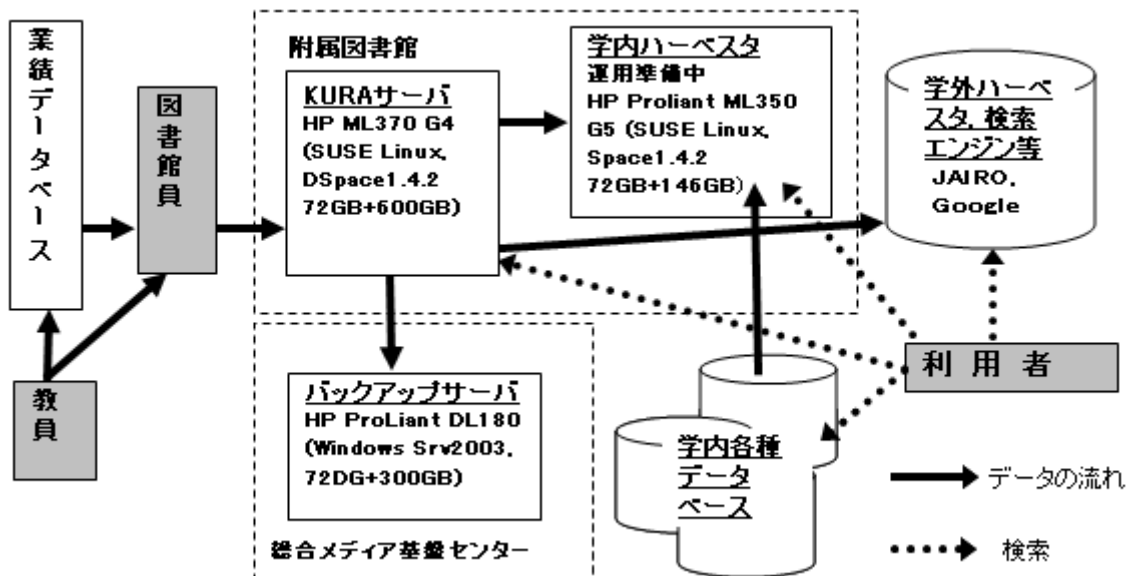
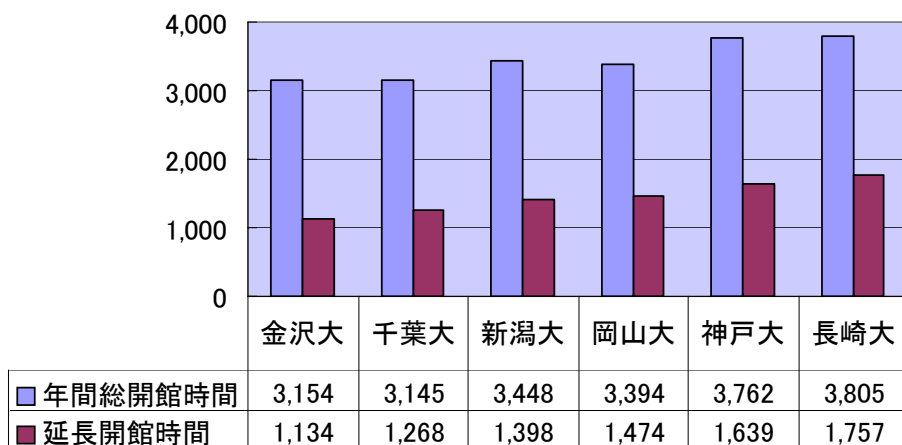
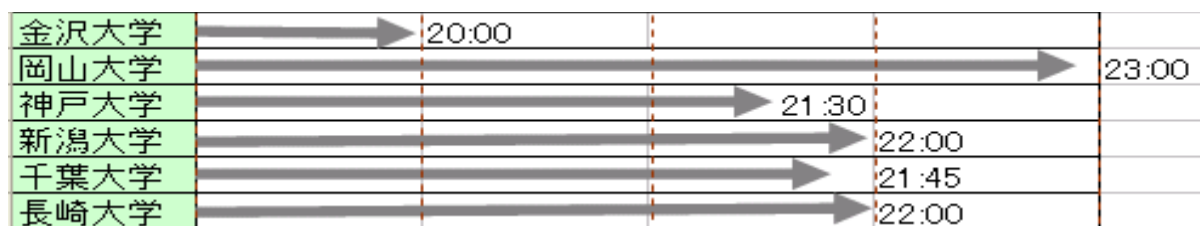


図 17 各大学中央図書館開館時間比較(平成 20 年度)



注) 延長開館時間＝夜間・土・日祝の開館時間



注) 平成 20 年度各大学図書館ウェブサイトより

図 18 総入館者数と学生および教員 1 人あたりの来館数の推移(平成 15～19 年度)

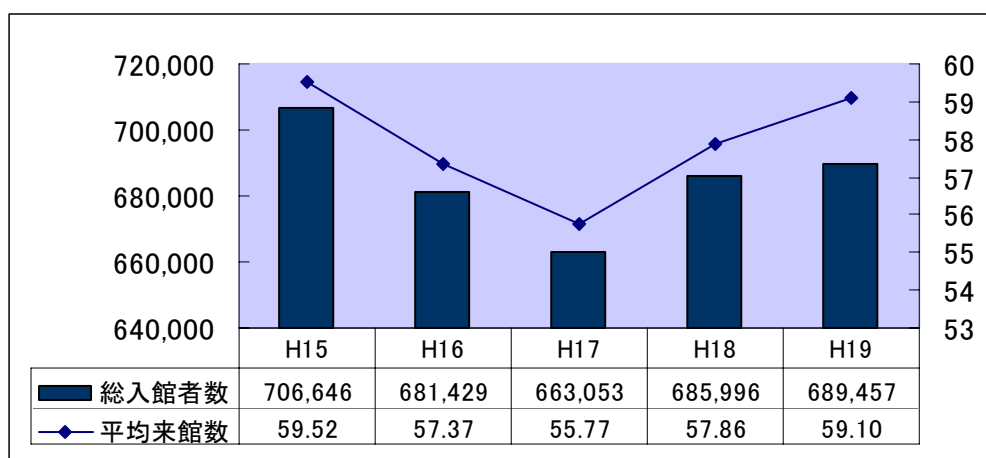


図 19 貸出冊数の推移(学生・教員別 平成 15～19 年度)

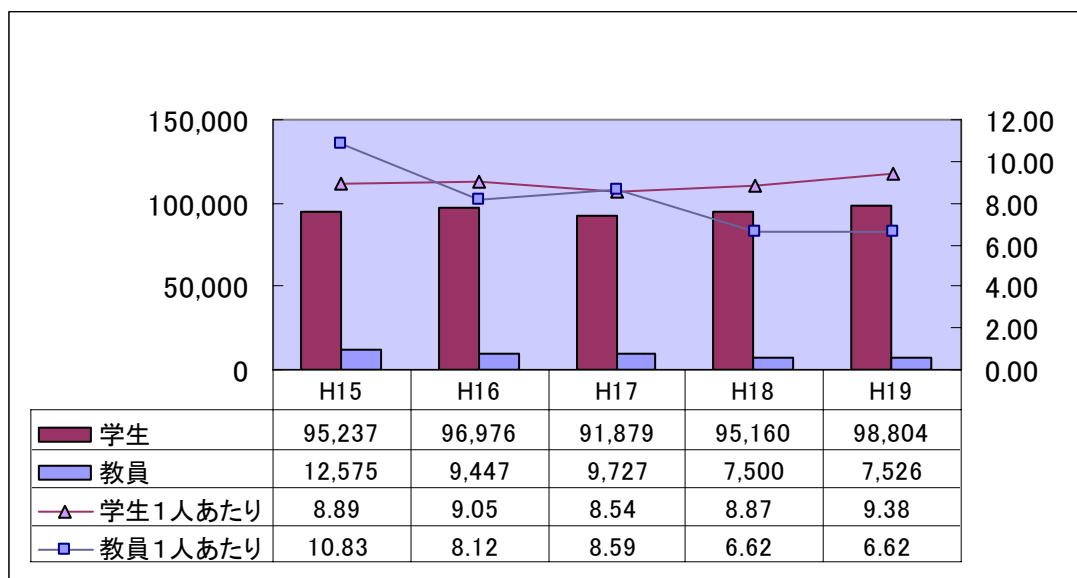


図 20 他大学との図書現物貸借数と比率の推移(平成 15～19 年度)

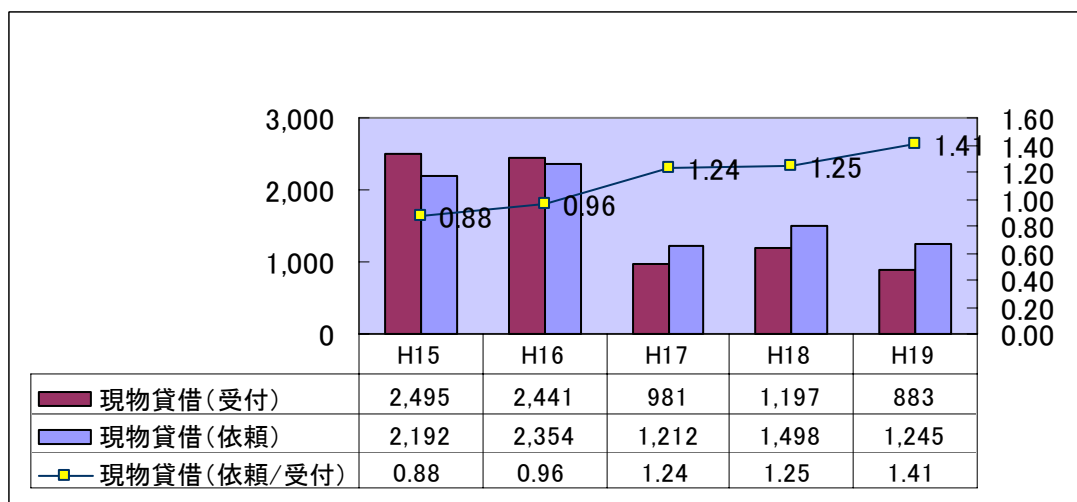


図 21 他大学との文献複写数と比率の推移(平成 15～19 年度)

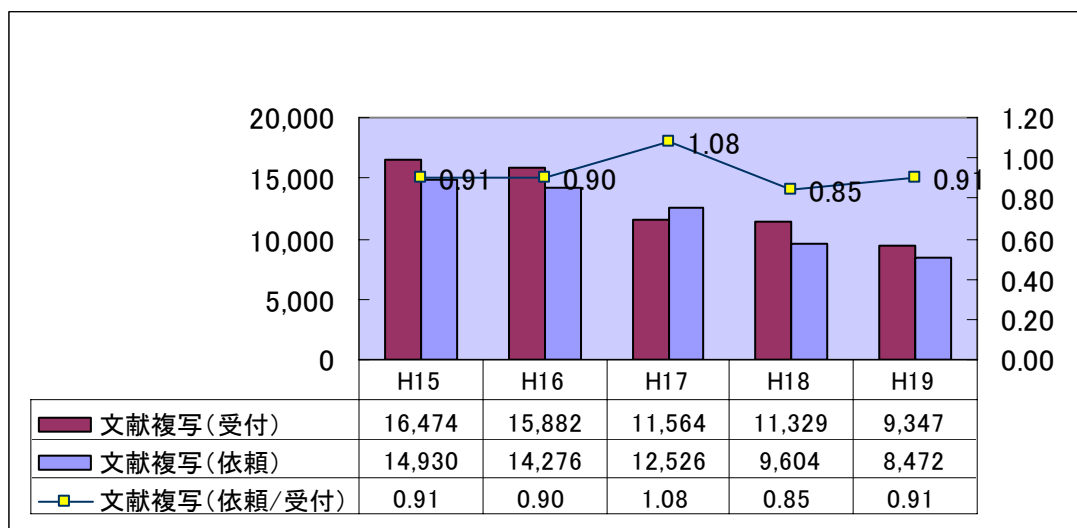
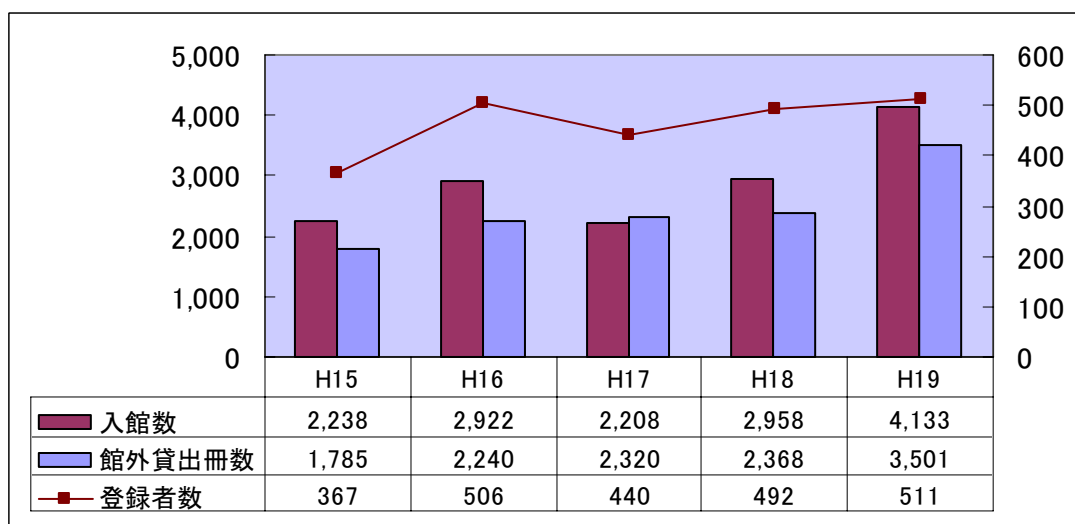


図 22 学外者入館者数, 貸出冊数および登録者数の推移(平成 15～19 年度)



7-2 表

表1 大学総経費に占める割合(平成19年度)

大学総経費(千円)	図書館総経費(千円)	大学総経費に占める図書館総経費の割合
45,490,327	495,392	1.09%

表2 図書館総経費の区分別割合(平成19年度)

図書館 総経費	図書館運営費 303,793 千円 61.32%				
	職員給与	賃金・謝金	外部委託費	賃借料	その他
	230,866	500	5,584	13,318	53,525
	46.60%	0.10%	1.13%	2.69%	10.80%
495,392 (単位:千円)	図書館資料費 191,599 千円 38.68%				
	図書購入費	雑誌購入費	電子資料費	その他の資料費	
	29,943	5,466	154,135	2,055	
	15.63%	2.85%	80.45%	1.07%	

表3 平成19年度図書館経費の出所別・区分別割合

区分	運営費		資料費	
	金額(千円)	割合(%)	金額(千円)	割合(%)
共通的な経費から	185,264	37.40	52,631	10.62
図書館経費から	108,862	21.97	33,241	6.71
他部局等経費から	1,166	0.24	105,727	21.34
外部資金	8,500	1.72	0	0.00
計	303,792	61.32	191,599	38.68

表4 図書館資料費の内訳と、学生及び教員1人あたり金額(平成19年度)

区分	金額(千円)	学生当たり(円)	教員当たり(円)
図書館資料費	191,599	18,200	168,510
図書購入費	29,943	2,840	26,340
うち、学生用図書	16,757	1,590	14,740
雑誌購入費	5,466	520	4,810
電子資料費	154,135	14,640	135,560
その他の資料費	2,055	200	1,810

表 5 施設概要(建物・閲覧席・収蔵能力 平成 19 年度末現在)

図書館名	閲覧座席数・面積・施設等		蔵書数※	収蔵能力※※
中央図書館 平成 2 年竣工	971 席	電動集密書架 特別資料室・特別閲覧室・AV 室・演習室・マイクロ資料室	1,257,548 冊	819,306 冊
	9,702 m ²		153% 蔵書数/収蔵能力	
自然科学系 図書館 平成 17 年竣工	575 席	自動化書庫・貴重書室 AV ホール・グループ研究室・ 研究個室	227,928 冊	523,250 冊
	6,513 m ²		44%	
医学系分館 昭和 44 年竣工	128 席	積層式 4 層 情報ラウンジ (保健学類図書室)	275,491 冊	242,639 冊
	1,845 m ²		114%	
	48 席	集密書架 グループ学習室		
	356 m ²			

※ 地区の部局所蔵含む

※※H19 学術情報基盤実態調査による。25 冊/0.9m (棚長) として計算

表 6 建物・施設等整備状況(平成 16～20 年度)

	中央図書館	医学系分館	自然科学系図書館
平成 16 年度		入口自動ドア化及び身障 者対応トイレ新設	自然科学系図書館竣工
平成 17 年度			自然科学系図書館開館
平成 19 年度	衛星放送コーナー機器更新 正面玄関を自動ドアに改修	2 F 閲覧室天井灯交換 空調機交換	
平成 20 年度	冷房用室外機 1 基を冷暖用に交換 無線 LAN 設備の増強 PC 用コンセント増設	1 F 閲覧室什器更新 1 F 閲覧室天井灯交換 無線 LAN 設備の設置	

表 7 AV 室等の利用状況(平成 15～19 年度)

施設名		H15	H16	H17	H18	H19
中央図書館 AV 室	回数	33	50	248	273	214
	人数	1,380	2,128	5,768	4,596	3,507
自然科学系図書館 AV ホール	回数			11	51	60
	人数			332	1,585	3,674

表 8 各館別機器数一覧(平成 19 年度末)

視聴覚機器等	中央図書館	医学系分館	自然科学系図書館
マイクロリーダー	4	0	0
ビデオレコーダー	12	4	10
CD/LD/DVD プレーヤー	17	2	10
利用者用パソコン	22	19	99

表 9 契約電子ジャーナルサービス及びタイトル数(平成20年度)

サービス名	タイトル数
Blackwell (全分野)	737
Cambridge University Press (全分野)	208
Elsevier Science Direct (全分野)	1,819
JSTOR (人文科学分野)	119
LWW (医学系)	100
Oxford University Press (全分野)	166
Springer-Link (全分野)	1,275
Wiley InterScience (全分野)	533
洋雑誌 その他※	433
和雑誌 (NII-ELS : NII 電子図書館)	377
合 計	5,767

※ ACS (化学) , Annual Reviews (医学) , GeoScienceWorld(地学) などのパッケージ及び個別タイトル

表 10 データベースの利用状況の推移(平成 17～19 年度)

データベース名	H17		H18		H19	
	ログイン数	検索数	ログイン数	検索数	ログイン数	検索数
全分野(社会科学+自然科学)						
1 GeNii				93,348	29,127	107,864
2 Magazine PLUS					3,385	12,533
3 Scopus	12,237	37,931	19,769	65,785	21,631	69,984
4 Web of Science				7,767		22,010
人文・社会科学系						
5 EconLit			80	292	55	220
6 LEX/DB			2,241	5,061	4,167	12,136
7 PsycINFO			496	2,353	533	2,461
8 SocINDEX, ERIC				521	39	195
9 Westlaw International			839	1,779	634	1,428
自然科学系						
10 医学中央雑誌	23,849		22,573		19,474	41,887
11 CINAHL	974	5,287	747	4,058	657	3,868
12 EBMR			1,379	6,058	1,639	7,343
13 GeoRef				984		902
14 JCR on Web			2,451	4,365	3,276	4,915
15 MathSciNet					11,170	14,369
16 SciFinder Scholar			4,750	18,442	4,939	17,824
新 聞						
17 聞蔵			2,046	11,896	1,765	10,920
電子ジャーナルのタイトル検索						
18 Serials Solutions				31,585		118,813

注) 7, 8 は平成 20 年度で中止

18 は平成 21 年度から” WorldCat Link Manager” に変更

空欄は未提供等, データなし

表 11 文庫等一覧

文庫名	内 容
第四高等学校蔵書	金沢大学の前身である旧制第四高等学校が所蔵していた図書。 青島文庫・教育掛図等を含む。
暁烏文庫	石川県白山市北安田町浄土真宗大谷派明達寺元住職，暁烏敏師旧蔵の図書。各分野に渡る膨大な蔵書。このうち 13,500 冊が仏教関係図書。
阿閉文庫	元金沢英和学校校長で，エスペラント語を広めたことでも知られる畜産業家阿閉政太郎氏寄贈の蔵書。
井田文庫	教育者，井田竹治氏寄贈の蔵書。享保 9 年から天保 8 年までの浄瑠璃本のコレクションを含む。昭和 25 年 12 月に本学に寄贈された。
浦井文庫	元第四高等学校教授，浦井鯉一郎氏及び同教授記念事業会寄贈の図書。西洋史に関する文献が多い。
金戸文庫	元県立中学校の数学教諭，金戸貞敬氏寄贈の和算書についてのコレクション。
岸文庫	元第四高等学校教授・元本学講師，岸重次氏寄贈の蔵書。英語・英文学関係図書中心。語学以外の資料は金沢市立図書館に寄贈。
駒井文庫	元第四高等学校教授，駒井徳太郎氏寄贈の蔵書。加賀藩刊行の図書・郷土資料等や経書類が多い。
鈴木文庫	元教養部教授，鈴木直治氏旧蔵のコレクション。古代漢語に関する資料が中心。
北条文庫	元第四高等学校校長・元学習院院長，北条時敬氏寄贈の蔵書。江戸期の写本が中心。日本青年館，日本棋院，石川県立図書館等にも寄贈。
用和堂文庫	旧加賀藩礼法指南役，渡辺家寄贈の蔵書。礼法及び有職故実に関する図書が中心。この蔵書は渡辺篤氏が四高在学中に寄贈したもの。
宮本文庫	元滋賀大学学長で第四高等学校卒業の宮本憲一氏寄贈の蔵書。平成 19 年 9 月に開設された。財政学，環境経済学，地域経済学，地方自治論，公害問題などの図書約 8,000 点のうち，整理が終わった約 4,000 冊が閲覧できる。
吉岡文庫	教育学部の前身石川師範校出身の吉岡勝恵（旧姓宮崎）氏の寄付金により，「郷土の研究に関する文庫」を意図して収集されたもので，石川県内の市町村史・学校史等が中心。
和田文庫	元法文学部教授，和田三良氏（専門は経済史）寄贈の蔵書。経済史学を中心として，法文経済系図書が多い。

表 12 コレクション一覧

コレクション名
National Reporter System. (全米判例体系)
Hansard : Great Britain Parliamentary Debates. 1066-1981 (ハンサード英国議会議事録)
Stenographische Berichte uber die Verhandlungen des Deutschen Reichstages. (ドイツ帝国議会議事録)
Annual Reports of the Major American Companies. (米国主要会社年次報告書)
東寺百合文書
明治前期産業発達史資料
百部叢書集成
景印文淵閣四庫全書
正統道蔵
敦煌宝蔵
西藏大蔵経
ビザンツ研究資料コレクション
西洋古典文学コレクション

表 13 3館の開館時間一覧(平成 20 年度)

図書館名	開館時間		
	平日	土曜日	日曜日
中央図書館	8:45-20:00 休業期 8:45-17:00	9:00-17:00 休業期休館	9:00-17:00 休業期休館
自然科学系図書館	8:45-20:00 休業期 8:45-17:00	10:00-17:00 休業期休館	休 館
医学系分館	8:30-21:00 休業期 9:00-17:00	10:00-16:00 休業期休館	休 館

表 14 3館の年間開館日数と時間数, 延長開館(夜間・休日)時間数(平成 19 年度)

図書館名	年間開館日数	年間開館時間数	うち時間外開館(※) 総時間数
中央図書館	320	3,223	1,185
医学系分館	299	3,284	1,188
自然科学系図書館	286	2,922	898

※) 平日 17:15 以降及び土・日・祝の開館

表 15 授業形式の情報リテラシー教育

開催年	科目名	対象・担当者
平成 11～17 年度	「大学図書館への招待～みずから学ぶ, 図書館資料を楽しむ～」	2 単位 定員 60 名 教員+図書館職員
平成 18～19 年度	「図書館利用法」(「大学・社会生活論」内の 1 コマ) 計 11 回 「資料探索法」(「情報処理基礎」内の 1～2 コマ) 計 39 回	全新入生対象 図書館職員で担当

表 16 ミニ展示一覧

展示名	展示期間
サッカーワールドカップ関連企画展示	2006/06/07～07/09
金沢大学教員著作図書展	2006/07/18～08/31
石川知学(ちがく)展	2006/10/01～11/19
就職図書展	2007/01/22～02/18
EU 資料展示『EU を知ろう!』	2007/05/21～06/03
石川知学(ちがく)展: 金沢編	2007/07/19～08/17
就職図書展	2008/01/08～02/10
EU 資料展『EU 資料に親しもう!』	2008/05/08～05/21
就職図書展	2008/12/15～12/25

表 17 石川県公共図書館との相互利用件数(平成 19 年度)

区 分		申込件数	実施件数	謝絶件数
相互貸借	依頼(借用)	44	43	1
	受付(貸出)	127	124	3
文献複写	依頼(受領)	0	0	0
	受付(提供)	64	62	2

表 18 開催シンポジウム一覧(平成 15～19 年度)

開催年	テーマ
平成 15 年度	デジタル時代における学術雑誌の新たな進展と著作権の課題
平成 17 年度	(金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム) これからの学術コミュニケーション： 電子ジャーナル・オープンアクセス・機関リポジトリ
平成 18 年度	学都シンポジウム： 学都の心を再び
平成 19 年度	金沢大学 3 学域化と総合大学の教員養成の新機軸： 地域における教員養成の過去・現在・未来

表 19 暁烏記念講演会演題・講演者一覧(平成 15～20 年度)

開催年	テーマ	講演者
平成 15 年度	暁烏敏の意義	松田章一
平成 16 年度	聖なるものを求めて： ある日本人僧と現代インド仏教運動	島 岩
平成 17 年度	自由の精神： 西田幾多郎と鈴木大拙に学ぶ	竹村牧男
平成 18 年度	菩薩として生きる	杉本卓洲
平成 19 年度	近代社会における宗教の役割： 仏教とウェーバー	立川武蔵
平成 20 年度	アメリカ人の見た日本の宗教： 地の果てへの旅	D. K. Andrews

表 20 開催特別展一覧(平成 16～20 年度)

年度	テーマ	開催期間
平成 16 年度	文字・人・こころ： 金沢大学ゆかりの墨跡・拓本・手跡	2004/10/26～11/7
平成 18 年度	四高開学 120 周年記念展示： 学都金沢と第四高等学校の軌跡	2006/10/16～10/29
平成 19 年度	教える×学ぶ： 師範学校といしかわの教員養成史	2007/10/15～11/16
平成 20 年度	うけつがれた「モノ」たち： 明治・大正・昭和の掛図・模型	2008/10/15～11/14

表 21 提供所蔵資料および提供先一覧(平成 16～19 年度)

申請日	資料名	申請者
2004. 7. 7	加賀藩年中行事図絵 4 帖	金沢市立玉川図書館
2004. 9. 3	加賀藩年中行事図絵から「香林坊の木戸」(写真)	(株) テレビ金沢
2004. 12. 8	第一高等学校校友会雑誌 294-300 号 (四高蔵書)	(株) 八木書店
2005. 1. 5	加賀藩年中行事図絵から「越前万歳」(写真)	(株) テレビ金沢
2005. 5. 27	百練抄, 源平盛衰記, 義経記 (四高蔵書)	石川県立歴史博物館
2005. 8. 26	金澤城分間絵図 (四高蔵書), 加賀藩年中行事図絵から「橋爪門」ほか(写真)	(株) 日本テレビ放送
2005. 11. 28	加賀藩年中行事図絵 (三)	東京都江戸東京博物館
2005. 12. 27	儀式風俗図絵から「元日登城」ほか 5 点, 加賀藩年中行事図絵から「婦人の年始」ほか 4 点(写真)	石川県立歴史博物館
2006. 1. 6	儀式風俗図絵, 加賀藩年中行事図絵 (全写真)	東京大学埋蔵文化財研究室
2006. 12. 22	ヘルツェル教育用掛図 1 4 軸 (四高蔵書) (画像)	京都大学
2006. 2. 22	室生犀星直筆「金沢大学校歌原稿」, 信時潔直筆「金沢大学校歌楽譜」	室生犀星記念館

2006. 4. 15	儀式風俗図絵から「髪置」「殿中謡初」「袴着」（写真）	（有）三猿舎
2006. 5. 19	儀式風俗図絵から『蚊帳つり』ほか10点，加賀藩年中行事図絵から『浜行』ほか1点（写真）	前田土佐守家資料館
2006. 5. 6	加賀藩年中行事図絵（下），儀式風俗図絵（乾）	石川県立歴史博物館
2006. 6. 15	寛文二年金澤御城御普請の絵図並奉書，寛文七年金澤御城二丸石垣御普請の絵図附奉書（四高蔵書）	鳥越一向一揆歴史館
2007. 3. 3	教科書コレクションの中から「中学国語二（下）」（学校図書）ほか15点	中谷宇吉郎雪の科学館
2007. 12. 13	儀式風俗図絵から『元日拝礼』ほか3点（写真）	北陸総合研究所
2008. 3. 26	法華義疏（暁鳥文庫）	大谷大学博物館
2008. 4. 9	Elementary Treatise on Physics（四高蔵書）	金沢ふるさと偉人館
2008. 6. 11	浅野御家之記（北条文庫）（マイクロフィルム）	NHK 大阪放送局

7-3 学術情報基盤実態調査（平成18年度）（注1）による他大学との比較表

赤字は国立大学平均を下回った数値

分割右欄の指数は、金沢大学の数値を各カテゴリ平均で除した指数

経 費							
項 目	金沢大学 (注2)	国立大学平均 (注3)		Aクラス17校平均		Bクラス18校平均	
図書館総経費(千円)	636,121	489,227	1.30	1,352,306	0.47	437,223	1.45
資料費(千円)(注4)	335,249	243,193	1.38	694,331	0.48	214,788	1.56
運営費(千円)	300,872	246,034	1.22	657,975	0.46	222,435	1.35
学生1人当たり図書館資料費(千円)	31.3	33.6	0.93				
大学総経費(注5)に占める 図書館総経費の割合	1.0%		1.7%		1.8%		1.5%
大学総経費に占める 図書館運営費の割合	0.5%		0.9%		0.9%		0.7%
図書館総経費に占める 図書館運営費の割合	47.3%		50.3%		48.7%		50.9%
図書館総経費に占める 人件費の割合	32.7%		36.7%		35.8%		36.1%
図書館総経費に占める 資料費の割合	52.7%		49.7%		51.3%		49.1%
大学総経費に占める 資料費の割合	0.5%		0.8%		0.9%		0.7%
資 料							
項 目	金沢大学	国立大学平均		Aクラス17校平均		Bクラス18校平均	
蔵書数	1,758,256	1,081,945	1.63	2,938,445	0.60	999,114	1.76
図書受入数	23,501	16,136	1.46	46,242	0.51	12,075	1.95
雑誌受入数	8,788	5,332	1.65	13,014	0.68	5,356	1.64

図書館・室の職員 (H18.5.1 現在)							
項目	金沢大学	国立大学平均		Aクラス 17校平均		Bクラス 18校平均	
専任職員	27	22	1.23	57	0.47	20	1.35
臨時職員	16	22	0.73	53	0.30	21	0.76
職員合計	43	44	0.97	110	0.39	41	1.05
図書館員 1人あたり学生数	249.8	165.0	1.51				
書架収容力 (H18.5.1 現在)							
項目	金沢大学	国立大学平均		Aクラス 17校平均		Bクラス 18校平均	
棚板延長(メートル)	57,067	35,694	1.60	95,681	0.60	31,945	1.79
収容可能冊数	1,585,195	991,494		2,657,801		887,356	

注1) 文部科学省による調査。平成20年11月現在公表されている最新版。

全体の総計とA~Dの大学規模別の集計値が公表されている。

A, Bクラスの内訳は下表に記載。金沢大学はAクラスに分類。

注2) 金沢大学のデータは他大学との比較のため、同調査報告時のデータで記載。

注3) 総計を当時の国立大学数87で除した値。

注4) 部局購入の資料費を含む。

注5) 学校基本調査の数値による。

Aクラス(8学部以上)17校	Bクラス(5~7学部)18校
北海道大学・東北大学・千葉大学・東京大学・新潟大学・金沢大学・信州大学・名古屋大学・京都大学・大阪大学・神戸大学・岡山大学・広島大学・九州大学・長崎大学・鹿児島大学・富山大学	弘前大学・山形大学・茨城大学・埼玉大学・岐阜大学・静岡大学・三重大学・山口大学・徳島大学・愛媛大学・熊本大学・琉球大学・筑波大学・総合研究大学院大学・島根大学・香川大学・高知大学・佐賀大学

7-4 定量的評価指標による基礎データ

大学・図書館規模		H15	H16	H17	H18	H19
大学規模						
a1.1	予算規模(千円)		41,452,034	42,721,000	44,465,276	45,490,327
a1.2	学部規模	8	8	8	8	8
a1.3	キャンパスの数	3	3	3	3	2
a1.4 スタッフ						
a1.4(1)	総学部学生在籍数	8,326	8,280	8,217	8,176	8,057
a1.4(2)	総大学院生在籍数	2,386	2,434	2,539	2,547	2,471
a1.4(3)	教員数	1,161	1,164	1,132	1,133	1,137
a1.5 図書館規模						
a1.5(1)	蔵書冊数	1,620,970	1,749,982	1,761,091	1,760,967	1,758,256
a1.5(2)	逐次刊行物所蔵数	32,972	33,404	32,628	33,443	34,212
a1.5(3)	図書館・図書室数	5	5	4	4	4
a1.5(4)	図書館施設面積	13,318	13,318	14,754	14,754	14,754
a1.5(5)	図書館職員数(非常勤職員・内数)	42(15)	42(15)	42(15)	43(16)	43(16)

資源		H15	H16	H17	H18	H19
a2.1 蔵書冊数						
a2.1(1)	利用対象者当たりの蔵書冊数	136.53	147.33	148.14	148.53	150.73
a2.2 収集活動						
a2.2(1)	利用対象者当たりの年間購入図書	1.74	1.27	1.16	1.24	1.34
	// 購読雑誌数	0.35	0.30	0.23	0.23	0.20
a2.4 目録資源						
a2.4(1)	OPAC データ入力率		54.89%	58.17%	64.67%	67.25%

管理運営		H15	H16	H17	H18	H19
a3.1 職員						
a3.1(1)	図書館職員当たりの利用対象者数	282.69	282.81	283.05	275.72	271.28
a3.1(2)	図書館職員当たりの蔵書数	38,595	41,666	41,931	40,953	40,890
	図書館職員当たりの図書受入冊数	815	749	560	595	720
	図書館職員当たりの雑誌受入数	215	220	209	208	187
a3.2 施設設備						
a3.2(1)	利用対象者当たり図書館面積	1.10	1.10	1.61	1.62	1.64

	閲覧座席数	1,328	1,328	1,722	1,722	1,708
	利用対象者あたり閲覧座席数	0.11	0.11	0.14	0.15	0.15
a3.3(1) 開館状況						
	年間開館日数(中央図書館)	288	287	325	318	320
	年間開館時間数(中央図書館)	2,967	2,922	3,302	3,204	3,223
	年間開館日数(医学系分館)		287	290	290	299
	年間開館時間数(医学系分館)		3,251	3,286	3,264	3,284
	年間開館日数(自然科学系図書館)H16は工学部分館		230	256	288	286
	年間開館時間数(自然科学系図書館)H16は工学部分館		2,335	2,638	2,958	2,922
a3.3(2) 休日・時間外の開館状況(中央図書館)						
	休日開館日数	5	5	42	42	39
	休日開館時間数	35	35	336	336	312
	夜間・土曜開館時間数	935	871.75	933	846	873
a3.3(3) 毎週の開館時間数						
	中央図書館	70.25	70.25	72.25	72.25	72.25
	自然科学系図書館(工分館)	61	61	63.25	63.25	63.25
	医学系分館		68.5	68.5	68.5	68.5
	保健学科図書室			69	69	69

サービス		H15	H16	H17	H18	H19
a4.2 図書館アクセス						
	入館者数	706,646	681,429	663,053	685,996	689,457
a4.2(2)	利用対象者の平均来館数	59.52	57.37	55.77	57.86	59.10
a4.3(1)	有人サービスポイント数	5	5	4	4	4
a4.4 貸出						
	貸出冊数(学生)	95,237	96,976	91,879	95,160	98,804
	貸出冊数(教員)	12,575	9,447	9,727	7,500	7,526
	貸出冊数(学外者)			2,320	2,368	3,501
a4.4(2)	利用対象者あたり平均貸出冊数	9.08	8.96	8.55	8.66	9.12
a4.7 ILL						
	貸借(受付)	2,495	2,441	981	1,197	883
	貸借(依頼)	2,192	2,354	1,212	1,498	1,245

	複写(受付)	16,474	15,882	11,564	11,329	9,347
	複写(依頼)	14,930	14,276	12,526	9,604	8,472
a4.7(3) ILL 受付件数と依頼件数の割合						
	貸借(依頼/受付)	0.88	0.96	1.24	1.25	1.41
	複写(依頼/受付)	0.91	0.90	1.08	0.85	0.91

経 費		H16	H17	H18	H19	
a5.1 全般						
a5.1(1)	大学総経費に占める図書館総経費の割合	0.77%	0.95%	1.05%	1.09%	
a5.1(2)	利用対象者当たりの図書館経費	26,891	34,230	39,442	42,468	
a5.1(3) 図書館経費の出所別割合						
	大学全体の共通的な経費からの配当	運営費	58.59%	46.17%	38.27%	37.40%
		資料費	1.75%	2.21%	10.01%	10.62%
	部局全体の共通的な経費からの配当 (図書館経費)	運営費	29.59%	26.23%	21.96%	21.97%
		資料費	9.74%	8.79%	7.34%	6.71%
	上記以外の校費から支出されたもの (他部局等)	運営費	0.02%	0.00%	0.37%	0.24%
		資料費	0.31%	15.36%	20.13%	21.34%
	外部資金	運営費	0.00%	1.23%	1.92%	1.72%
		資料費	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
	合計	運営費	88.19%	73.64%	62.52%	61.32%
		資料費	11.81%	26.36%	37.48%	38.68%
a5.2 図書館運営費						
a5.2(1)	図書館総経費に占める図書館運営費の割合	88.19%	73.64%	62.52%	61.32%	
a5.2(2)	図書館総経費に占める人件費の割合	74.42%	57.16%	48.86%	46.70%	
a5.2(3)	図書館総経費に占める外部委託費の割合	0.89%	2.58%	0.54%	1.13%	
a5.2(4)	図書館総経費に占める賃借料の割合	4.12%	3.29%	2.87%	2.69%	
a5.2(5)	図書館総経費に占めるその他の運営費の割合	8.76%	10.60%	10.25%	10.80%	
a5.3 図書館資料費						
a5.3(1)	図書館総経費に占める図書館資料費の割合	11.81%	26.36%	37.48%	38.68%	
a5.3(2)	図書館資料費に占める図書購入費の割合	44.9%	17.9%	14.9%	15.6%	
a5.3(3)	図書館資料費に占める雑誌購入費の割合	9.1%	6.1%	4.7%	2.9%	
a5.3(4)	図書館資料費に占める電子資料費の割合	44.7%	74.6%	79.2%	80.4%	
a5.3(5)	図書館資料費に占めるその他の資料費の割合	1.3%	1.4%	1.2%	1.1%	
a5.3(6)	利用対象者当たりの図書館資料費	3,175	9,024	14,783	16,430	
a5.3(7)	利用対象者当たりの図書購入費	1,424	1,611	2,203	2,570	

a5.3(8)	利用対象者当たりの雑誌購入費	288	554	691	470
a5.3(9)	利用対象者当たりの電子資料費	1,420	6,733	11,715	13,210
a5.3(10)	利用対象者当たりのその他の資料費	43	126	173	180

注) 定量的評価指標については、以下の資料を参考にした

「大学図書館における評価指標報告書 (Version 0)」2002年3月14日

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/anul/j/publications/reports/73.pdf>

8 自己点検・評価コメント一覧

1 組織・管理・運営

- ・比較対象のため、Aクラス校（金沢大学）・Bクラス校という分類を利用しているが、平成19年度版金沢大学財務レポートでは文科省基準によるAグループ校・Gグループ校（金沢大学）分類が利用されている。扱う問題により分類を変えることはあってもやむを得ないが、理由を述べるべきであろう。いずれにせよ、図書館員一人あたりの学生数が国立大学平均の1.51倍と相対的な過負荷状態で、しかも大学総経費に占める図書館総経費の割合が1.0%と国立大学平均1.7%より大幅に低い中で、一定レベルの図書館サービスを実施していることは評価できる。
- ・職員数が多くないことは、経費削減・効率化の面ではプラスでも、利用者サービスの面ではマイナス。後者に傾かない努力を継続する必要がある。
- ・少ないスタッフで、良好な管理・運営を継続されている点は評価できる。
- ・図書館業務に係わる組織・管理・運営については、情報部全体の視点からの評価も必要と思われる。
- ・図書館が学術情報基盤整備の中核的な役割を果たすためには、図書館長が（図書館長として）学内意志決定機関に積極的に参画する必要があるのではないか。
- ・図書館専門職の育成及びキャリアパスの確立が必要である。
- ・情報部への組織再編後、管理業務が増えている点、情報企画係の新設に伴う参考係の廃止などに耐えつつ現状を維持している点が評価できるが、サービスの厚みが図書館の存在意義であるとするサービス系の人員数につき、配慮することが望まれる。

2 予算・経費

- ・電子ジャーナル経費の共通経費化、学生用図書費の制度化（一冊単価での学生1人一冊分の予算の確保）など、明確に法人化後の厳しい状況の中で着実に改善されている点が高く評価される。ただし、学生用図書1人一冊が実現されていない点（単価の積算の問題か？）など、理念と実態をあわせていくことが望まれる。
- ・電子ジャーナル購入用の経費が増大しているが、これでもかなり経費抑制の努力をしている結果であろう。今後もある程度の受益者負担の原則を入れないと、経費抑制は避けられないように思われる。
- ・電子ジャーナルや学生用図書の充実が評価される一方、学術性の高い図書の購入が一般に減少しているし、大型コレクションの購入も実現しがたい状況にある。

- ・限られた予算の中で、電子ジャーナルの充実など、予算・経費の効率的運用の工夫が行なわれている点が評価できる。
- ・評価項目全体に言えることだが、ある程度の「評価軸」がないと評価が難しい。例えば、A クラス大学と比較した場合、図書館総経費、資料費及び運営費は半分以下なので「不十分」と思われるが、図書館総経費に占める図書館運営費の割合などは「おおむね良好」と思われる、など。
- ・電子ジャーナルの恒常的かつ安定的な経費確保が望まれる（高騰化対策）。

3 施設・設備

- ・自然系図書館を中心にかなりの整備が進んでいるが、今後は整備が遅れている図書館の整備を進める必要がある。
- ・受け入れスペースが狭小なために、貴重な重複図書が廃棄されるのは残念な事態である。
- ・自然科学系図書館の竣工により大幅な施設・設備の充実が図られた点は高く評価できる。またキャンパスインテリジェント化計画に基づく無線 LAN 整備など、ICT インフラの整備にも努力している点は評価できる。反面、医学系図書館の老朽化への対応と、返納図書増加に伴い早晚枯渇することが予想される中央図書館・医学系図書館の収蔵能力の増強が重要課題と考えられる。
- ・医学系図書館において、改築までの間、一部の改修工事が予定されていることは評価できる。
- ・医学系図書館の改築及び中央図書館の狭隘化対策が必要である。
- ・自習環境の改善（特に冷暖房）及びアメニティの整備が望まれる。
- ・閲覧用 PC の管理運用体制及び無線 LAN や情報コンセント等の整備が必要である。
- ・施設・設備の改善要求等は、要求後のウォッチとフォローアップが重要である。
- ・時代に即した施設・設備の整備が望まれる。
- ・築 20 年となる中央図書館は空調や電動書架など設備の老朽化が進んでおり、今後、機器等を計画的に更新することによって、安定的に運用することが望まれる。また、文系部局からの返納図書の急激な増加により、収蔵能力の限界に近づきつつある。
- ・築 40 年となる医学系図書館は、老朽化が進み、居住性が著しく劣化している。宝町地区の再開発マスタープランに着実に組みいれるとともに、当面の緊急的な措置としてリフォームを行う必要がある。
- ・新営された自然科学系図書館では、質の高い施設設備を提供できており、自動化書庫も含め PFI による運用もほぼ安定しつつあるが、空調の運用等、若干問題が残っている。
- ・自然科学系図書館の新営と、中央図書館、医学系図書館の老朽化・書庫の狭隘化が相殺して、このような評価となる。3 館が同じレベルの設備を提供して、真の全学サービスとな

ることが図書館にとって重要であり、理念にあわせて3館の施設・設備を鋭意整備していくことが望まれる。とりわけ、医学図書館の老朽化が激しく、同じ旧六大学の千葉大、新潟大学に比して、明らかに劣る施設・設備の改善が望まれる。

- ・3館体制下で、各学域・研究域に相応しい学習支援機能・研究支援機能・収蔵機能を勘案した将来計画の策定が必要である。
- ・在庫冊数が既に許容 capacity を超えているので「将来的な」拡張では不十分かつ医学系図書館の老朽化はあきらかであるのに将来計画が進行していない状態は明らかに異常。

4 情報資源・資料

- ・ここ数年間で電子ジャーナルの購入タイトル数が整備されてきたことは評価できるが、その割に大学院生の電子ジャーナルに関する評価 (LibQUAL+™) が高くないのは、工学系大学院生の回答が大かったためであろうか。また KURA の立ち上げと拡充の努力と成果は高く評価されるべきであろう。今後は、教員評価システムとの連携も重要な課題である。
- ・KURA や電子ジャーナルの充実の評価できる。図書に関しては、図書購入予算が減少する中である程度冊数を確保しようとするれば、高価な学術性の高い図書は買えなくなる。とくに文系の教員の利用が減少する一因と考えられる。
- ・計画的整備によって、平成15年度から平成19年度の間、電子ジャーナルのタイトル数が大幅に延びたことは高く評価できる。また、金沢大学学術情報リポジトリ (KURA) の立ち上げにより、本学教職員等の教育・研究成果がインターネットを通して世界中に情報発信される環境が充実した点も高く評価できる。
- ・ただし、LibQUAL+™2008 による調査で、特に研究資料としての書籍・雑誌・電子情報資源に関する IC-3, IC-4, IC-8 の質問項目で、利用者が感じる図書館の実情と、図書館に期待する最低限の要求レベルが近接していることは留意すべき事項である。特に教員から現状が必要最低限程度と厳しく評価されている点を真摯に受け止め、今後も電子ジャーナルをはじめとする各種資料の計画的整備をはかるだけでなく、急速に発展する ICT 化、電子化の流れを見極めて、本学の教育・研究基盤を支える情報源としての図書館の将来のあり方を議論していく必要があると考える。
- ・電子ジャーナルのタイトル数の増加は評価できる。
- ・KURA のコンテンツ収録数及びダウンロード数の増加は評価できる。
- ・KURA のさらなる拡充が望まれる。
- ・選書に係わるニーズ把握の改善が必要と思われる。
- ・特徴ある資料群を、今後さらに学習教材や研究資料として役立てる必要がある。
- ・和古書資料の目録電子化の推進が必要である。
- ・貴重資料の電子化・公開について検討する必要がある、関連分野の教員の協力を得て調査

を行うことが望ましい。

- ・法人化後の厳しい財政状況の中、ある程度の厚みのサービス（電子ジャーナルタイトル数、図書数）を確保していることは評価できる。しかし、電子ジャーナルや DB の提供数の相対的な改善に比べて、人文社会系の高額資料など、個人研究費の縦割りの制度の中で整備が難しい資料を本学の研究・教育の基盤として掬い取る予算の措置と充実が望まれる。（理科系と人文社会系のサービスの均衡化の必要性）

5 サービス

- ・3館で開館時間がバラバラなことや自然系図書館での24時間開館時のエアコン等の不満も大きい。今後は24時間開館を止めて、開館時間を揃えて22時までの開館時間にすることは合理的である。
- ・書籍利用から電子媒体利用への変化による図書館の利用方法の変化は当然の流れと考えられる。
- ・開館時間の延長・短縮の議論には、利用者の利便性だけでなく、エネルギーの節約や利用者の安全確保の視点が重要と考える。
- ・利用者の満足度調査などからもサービスは全般的に良好と考える。また情報リテラシー教育においても、積極的に図書館利用のための教育が行なわれており評価できる。ただし、開館時間については、利用者からも延長の要望が多く、また全国の他大学と比べても開館時間の延長が実現できる体制を整えることが望ましいと考える。
- ・図書館専門職としての能力向上（資料組織化からサービス業務にシフト傾向？）及びサービス業としての接遇等の改善が必要と思われる。
- ・サービス向上に役立つ研修へ職員を積極的に派遣し、個人のスキルアップをはかると同時に、研修成果を共有する態勢を整え、全体のレベルを底上げする必要がある。
- ・開館時間については、他の同規模大学と比べ短く、あきらかに見劣りがする。全学的な学生サービスの視点から手当てが必要である。
- ・情報リテラシー教育については、未だ、教員・学生ともに評価を得るには至っていない。今後も継続する必要があるが教材の改善やフィードバック、FDとの連携が今後の課題である。
- ・貸出冊数、閲覧冊数など統計的にはそれなりの評価はできる。また、リテラシー授業への参加など努力は認める。しかし、本当に学生が便利さを享受・実感できるまでには多くの改善が必要ではなからうか。例えば、開館時間の延長などは時代の流れ（学生のニーズを掬い取るサービスの展開）であり、まだまだ不十分である。物理的に改善できる要素と人的な資源とサービス体制に依存する部分は切り離し、（統計では読み取れない）利用者ニーズをいかに把握し、サービスに反映するか検討が必要。係の削減など時代（のニーズ）

に逆行している面もあり、このような評価とした。

- ・移転後の来館者の伸びは評価できる。
- ・留学生の利用状況が不詳。今後、急激に増えるであろう留学生の利用環境を整え、利用促進を検討すべき。

6 地域連携・社会貢献

- ・石川県内の横断検索システムへの参加や、北陸3県への貸し出し対象者の拡大など、着実に学外者の利便性が向上しており、地域連携に貢献しているといえる。
- ・学外利用者に対し、地域連携・社会貢献に資するためのアンケート調査を実施してはどうか。
- ・前身校旧蔵資料等、地域に根ざした特色ある資料を用いて、展示会等の活動を行っており、地域および全国の博物館等関連機関やマスコミへの資料提供も活発である点が評価できる。
- ・今後は図書館資料の体系的な展示・公開と情報の発信についても検討していく必要がある。
- ・イベントの開催については、費用対効果を勘案するとともに、他業務のとのバランスを考慮して過度な負担とならないよう精選して計画することが必要である
- ・本学の職員数・規模としては、資料館ともども良く努力していると考ええる。図書館の基本的な役割の一つは、電子化の時代においても貴重な史資料の保存と公開にあり、その役割に忠実に公開展示や講演会を実施している。しかし、図書館のシンポジウムが隔年になったことなど後退した面もあり、史資料の展示のような図書館固有のアピール点などとあわせて図書館の社会貢献機能を強化することが望まれる。(ハイブリッドな図書館機能の意識化の必要性)
- ・大学図書館らしいシンポ、講演会、展示企画は評価できる。
- ・大学が主催する各種公開講座や市民大学院においても、新入生対象のような「大学図書館への招待」などを開講し、存在と利用を地域にアピールする努力を。ラジオなどのメディアを利用して、(地の利は悪いが)大学図書館の魅力と特質を定期的に紹介するのもいいと思う。
- ・実質医学系図書館には地域連携は存在しない。

7 その他

- ・アピール不足。資料を見るとサービスが法人化後、一定改善されていることが明白である。こうした点に分かるように利用者に訴えるべきである。一方、学生サービスは常時利用者

のフィードバックを行い、図書館の重点施策として（「教育重視の研究大学」）改善の努力をすべき。

- ・先駆的・先進的な図書館業務に関する取り組みが期待される。
- ・企業及び同窓会との連携事業の検討が必要である。
- ・学内及び地域に対し、図書館活動の PR やアピールが足りないのではないか（図書館主催のシンポジウム等の開催等）
- ・図書館職員の地位向上？のために、教育支援（情報リテラシー教育等）にも積極的に携わっていく必要がある。

8 全般について

- ・我が国から3校しか参加していない LibQUAL+™による利用者満足度調査に本学が大阪大学、慶應義塾大学と共に参加したことは高く評価される。しかし、拡充に努めた電子ジャーナルや自然系図書館を開設し最新の設備を備えた図書館設備など全般にわたって、その結果があまり芳しくないのは、不満を持っている者が積極的に回答するからであろうか。もう少し回答率を向上させた再調査が望まれる。
- ・質の高い図書の整備が予算的に苦しいなか、暁烏文庫等既存の文庫資料の活用、たとえば文庫資料を底本とする教科書の作成、市民大学院論文集への翻刻掲載などがさらに推進されるのもよい。
- ・予算・職員数など、必ずしも潤沢といえない中で、様々な工夫をして、図書館の維持管理、また改善を行なっていることが認められる。ただ、LibQUAL+™2008 による利用者アンケートでは、利用者は必要な要求レベルは満足しているものの、望ましいとされるレベルまでの隔たりはまだ大きく、今後もさらなる努力を期待する。
- ・特に電子ジャーナル・DBなどの電子資源、リテラシー教育への参加、予算の共通経費化、自然科学系図書館の新営などいくつか特筆すべき点がある。一方、学内外での図書館のアピール不足がこうした成果が周知されることを妨げている。また、3館体制と言いながら、サービスにばらつきがあり、今後理念に基づくトータルな図書館機能の整備が必要。
- ・LibQUAL+™の AS-1「図書館スタッフは利用者に自信を持たせてくれる」は大学図書館の「司書」機能の充実に関わる本質的項目であるから、利用者の期待そのものをアップさせる必要がある。